

東方空壞創

神狼 血紅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1人の少年が、今日幻想郷に現れた。その少年は記憶をなくしていて、自分の名前や特殊な能力、基礎的な知識しかおぼえていなかった、少年が記憶を取り戻そうとする中数々の異変が起きる。少年は異変を仲間と共に解決していくのであった。そして、記憶を取り戻した少年が見たものは……

よくある主人公最強物です。お嫌いな方はブラウザバックを、OKな方はそのままお進みください。よろしくお願ひします。

目次

零章 いつか、また会う日まで

第1話 約束は儚く散る | 1

一章 幻想郷での生活

第2話 ここはどこで、俺は誰？

4

第3話 スペルカードと弾幕ごっこ

9

第4話 初！弾幕勝負！ | 14

第5話 人里とバカルテット+α

18

第6話 幻想郷の地理 | 24

第7話 九ノ属の剣、妖を断ち切る刃

となれ | 30

二章 紅く染まりし狂気の幻想

第8話 紅き幻想に悪魔は降り立つ

前編 | 38

第9話 紅き幻想に悪魔は降り立つ

中編 | 46

第10話 紅き幻想に悪魔は降り立つ

後編 | 53

第11話 狂気を超えろ！ | 60

第12話 紅魔異変その後 | 70

第13話 後悔はしない | 80

三章 血染めの妖怪桜、再び

第14話 半人半霊の庭師（アホ？）、

	登場!	87
	第15話 異変の真実	94
	第16話 蘇る妖	101
	第17話 決戦! 西行妖!	108
	第18話 決着、そして別れ	114
	四章 巻き込まれ!?! 幻想郷に帰るために	
...		
第19話 再開した同級生		121

零章 いつか、また会う日まで

第1話 約束は儚く散る

ある学校の校門前に1人の少年がいた。

その少年の名は、東風谷 星羅（こちや せいら）その容姿から私服姿だと女性に間違われるほどである。今はかろうじて制服姿なので男性に見えるが

「たくつ、あいつおせえなあ」

そんな愚痴をつぶやいていると

「お兄ちゃん。おくれてごめん（涙）」

「遅いぞ早苗。」

近寄ってきた少女の名は東風谷 早苗（こちや さなえ）。星羅の妹でもある。学校の男子生徒からかなりの数のラブレターをもらっているが全て断っているつわものだ。昔、髪の毛の色でいじめにあっていたが星羅の協力があつて今もこうして生活している。「いや〜ラブレターを全部断ると、係の仕事に時間がかかつてさ。」

「はあ…なぜ断る必要があるんだよ。普通にOK行つて付き合えばいいじゃないか。どこに断る必要がある。」

「私はお兄ちゃん一筋なの！それに毎回みんな私のこと変な目で見るからだよ。」

「それはしょうがないが、せめて兄離れしろ、ブラコン。」

「ひどい!!?そこまで言わないでよお兄ちゃん!!?」

「まあこんなどうでもいい話はほつといて、さつきと夕飯の買い出しにいくぞ！」

「あつ！待ってよお兄ちゃん！」

~~~~~少年少女移動中or買い出し中~~~~~

　　そういえばまだいってなかったことがあるな。実は俺と早苗は特殊な能力を持って  
いるんだ。早苗は、奇跡をおこす程度の能力を持っている。俺の能力だが幼い頃に力が  
暴走したために能力に制限をかけ自らの記憶を消した。そのため幼い頃の記憶は残っ  
ていない。親からは、身体を強化する程度の能力と言われている。

「お兄ちゃんさつきから誰に説明してるの?」

「声に出してたか?」

「思いつきり出てたよ。最初から最後まで。」

「まじでか、いや、読者の皆に説明をしていたんだよ。」

「お兄ちゃん発言がメタいよ!?!?」

「まあまあ、いいじゃないか。」

「はあ…まあいいけどさ。」

「気にしない気にしない。」

「あつ!もうこんな時間!急がないと、お兄ちゃん早く!!?」

「あつ!こら、いきなり走るな!」

早苗が道路を渡ろうとした時いきなり早苗の横にトラックが現れた。

「なつ…!させない!」

俺は瞬時に能力で瞬発力とスピードを強化して一気に早苗に追いつき早苗を押した。

「痛つ!お兄ちゃんなんでおすのつて、お兄ちゃん?どこいったのお兄ちゃん!返事してお兄ちゃん!お兄ちゃん!………大変。急いで神奈子様と諏訪子様にしらせないと!」

(早苗、またいつか会えると信じてるよ)

誰にも聞こえない声か風に乗って消えていった。

その日一人の少年が姿を消した。

## 一章 幻想郷での生活

### 第2話 ここはどこで、俺は誰?

ピヨッピヨッピヨッ

「うっ、うあ、ここは?どこだ?」

俺が立ち上がろうとすると

「あら、もう起きたのね。」

「っ!!?誰だ!」

俺は瞬時に自分が被ってた布団から跳ね起きた。

「助けてあげたのにその言いようは、ないんじゃない?」

「なに?」

「私の名前は、博麗 霊夢よ。ここ幻想郷で博麗の巫女をやっているわ。あんたは?」

霊夢 seed

ふあくよく寝たわ。全く、うちの神社には、参拝客がこないのに紫がゆうには、『いつかくるわよ』って、言ってたけど全くこないじゃない。根気よくねばるしかないのかし



ら。

「今日も掃除しますか。」

~~~~~少女移動中~~~~~

「今日もいい天気ねー。なにか降ってこないかしら。」

そんなことをつぶやいた時

ドサッ

「え?!なに!?!」

「ううっ」

「…………誰かしら? 格好からして外来人だと思うけど、さては、また紫ね、なにを考えているのかしら? まあ、いいわ、あとで聞けばいいし。」

~~~~~少女運び中~~~~~

さて、彼女が起きるまで少し早いけど朝食をつくりですか。ついでに彼女の分も。

~~~~少女料理中~~~~

さて、作り終わったし彼女の様子をみにいきますか。

「うっ、うあ、ここは？どこだ？」

「あら、もう起きたのね。」

「っ!!？誰だ！」

警戒心強いわね〜

「助けてあげたのにその言いようは、ないんじゃない？」

「なに？」

「私の名前は、博麗 霊夢よ。ここ幻想郷で博麗の巫女をやっているわ。あんたは？」

霊夢 seed out

「俺の名前は、……………」

「？いきなり黙り込んでどうしたのよ？」

「思い出せない。大切なことが思い出せない。」

「はあ？あんた自分の事が思い出せないの？」

「そのようだ」

すると、突如空間から金髪の女性が出てきた。

「あら、それなら私が手伝いしましょうか？」

「確かにあなたの能力があれば出来るかもね。紫、頼んだわよ。」

「だ、だれだ？」

「自己紹介が遅れたわね。私は、八雲 紫。スキマ妖怪で妖怪の賢者をしておりますわ。」

「ただの胡散臭いBB「霊夢は黙ってちようだい」……」

「私の能力は、『境界を操る程度の能力』。これで貴女の記憶の境界を操り強制的に記憶を戻します。」

「そんなことができるならやってくれ。」

「わかったわ、それじゃあ行くわよ。「ブオン」………よし、これで良いはずよ。完璧には戻ってないけどある程度は、戻ったは。」

「そう、っ!!? な……なんだ! この頭……の! 痛……み……は! ……ぐっ!!?」

「ちよつとあなた大丈夫なの!？」

「意……織……が、もう……ろうと、して……」バタン

「あんたしつかりしなさい! 紫! どおゆいことよ! いきなり苦しみ出したじゃない!」

「大丈夫よ、霊夢。すぐ起きると思うわ。」

「あんたなに根拠のな「ぐっ、ううっ」！あんた大丈夫！」

「大丈夫だ。それよりも記憶が少し戻ったようだ。」

「改めて自己紹介しよう。俺の名は東風谷 星羅。そして幻想郷の外の世界で数少ない能力保持者の1人だ。」

第3話 スペルカードと弾幕(っつこ)

数少ない能力保持者。霊夢と紫は、この言葉に反応した。能力を持っているものはそう珍しくない。それが幻想郷であつたららの話だ。しかも外の人間ときた。霊夢と紫は、気付かれないよう警戒し始めた。

「それで？ 貴女の能力は、なんてゆうのかしら？」

『身体を強化する程度の能力』だ。使ったことがないはずなのに使い方がよくわかる。「記憶があるときに使ってたおかげでわかるんじゃないかしら？」

「そうかもな。そういえば霊夢の能力はなんなんだ？」

「言つてなかつたわね、『空を飛ぶ程度の能力』よ。」

「なるほど、考え方しだいでは強い能力だな。」

「よくわかつたわね。あ、貴女お腹へってるでしょう、準備出来るからついて来なさい。」

「そうなのか、すまないな。」

「それじゃあお言葉に甘え「あんたの分は無いわよ、紫」……………」

~~~~~少年少女移動中~~~~~

「さっ、食べるわよ。いただきます。」

「そうだな、いただきます。」

「私がいるの気付いてた癖に作らないなんていじめよいじめ……………」

~~~~~少年少女食事中+BB（ピチューン）~~~~~

「ごちそう様でした。美味しかったよ。」

「お粗末様。ありがとね」

「食事もすんだし、さっさとするわよ」

「?なにをするんだ?」

「貴女が幻想郷で生きるための特訓よ。」

「さいですか……………」

「そうね、まずスペルカードからよ。」

「スペルカードとは、なんだ?」

「スペルカードとは、この幻想郷で勝負する時のルールに必要な物よ。多く持っていても損じゃないけど作るのが面倒くさかったら最低でも10枚あれば十分よ。次はスペルカードルールについてよ。スペルカードルールは私が考えたもので、これは、弾幕ごつこのルールになるわ、最初に使用スペルカード数と被弾数をきめて勝負開始よ。例えば使用スペルカード数が3枚で被弾数が5だったりすると自分が持っているスペルカードの中から3枚まで使用して相手に弾幕を5回当てれば勝ちよ。スペルカードだけじゃなくても普通の弾幕でもOKよ。あんたにはまず3枚スペルカードを考えてもらうは、作り方は、いたって簡単。自分が作りたいスペルカードの弾幕を想像するだけ。簡単でしょ？ただ強いだけじゃなくて綺麗差も必要になってくるから気おつけてね。」

「そうか、わかった。」

「でも貴女弾幕だせるの?」

「弾幕らしき物の出し方なら出てきた記憶にあつたぞ。」

「あらそう、なら大丈夫ね。」

「はいこれ、白紙のスペルカードよ、また必要になつたら私に言いなさい、予備の白紙があるから。」

「ありがとう、それじゃあ考えるよ。」

~~~~少年スペルカード製作中~~~~

「……………よし、出来た！」

「以外に早かったわね。30分で出来るなんて、一時間はかかるかと思ってたは。

せつかくだし試し打ちしたらたどうかしら？」

「試し打ちするって言ってもどうするんだ。相手がいない。」

「そうね、そこらへんの妖精でもつかまえ「霊夢~~~~」る必要は、なくなつたわね。」

向こうから凄い速さで向かってくる女性がいた。……………箒にまたがつて。

この時、星羅は思った。

箒は掃除をするための物と知らないのか？彼女は。と、

「その見ない顔の奴。なんか失礼なこと考えなかつたか？」

「いや、ぜんぜん考えてないぞ。」

「ならいいZE、私の名前は、霧雨 魔理沙。普通の魔法使いだ!!」

ででんと効果音でもつきそうな自己紹介をした彼女、霧雨 魔理沙とか言ったな

「あら魔理沙、ちようど良いは、星羅の弾幕ごっこの相手になつてくれないかしら。」

「星羅っていうのか？別にいいぜ!!」



「それじゃあ早速外にでて始めましょうか。」

こうして星羅の初弾幕勝負の相手が魔理沙に決まったのであった。

## 第4話 初!弾幕勝負!

現在博麗神社前で3人の女性と1人の男性がいた。

「星羅!準備はいいか?」

「ああ、よろしく頼む。」

「それじゃあルールの確認ね、スペルカードは3枚、被弾数は、1回でいいわね?」

『ああ(おう!)』

「それじゃあ……弾幕勝負……開「開始!」始って紫!私の台詞を取らないでよ!」

先に動き出したのは、魔理沙の方だった。

「いくぜ!星羅!魔符『スターダストレヴアリエ』!」

魔理沙がスペルを発動した瞬間。星羅に向かって星型の弾幕がとんできた。

「(先ずは、脚力と五感、瞬発力を強化)せい!」ドゴオン!

星羅は、上空に向かって斜めに飛び上がった。

ドドドドドドドドドドドドドドド

先ほど星羅がいた場所には、魔理沙のスペルがあたり、星羅が作った小さいクレーターに更に弾幕が当たった跡である、くぼみができていた。

「次はこつちだ！霊尾『人魂五裂散』！」

星羅が放った五個の大きめ人魂が魔理沙に向かって飛んでいく

「そんな薄い弾幕、相殺してやるぜ！」

魔理沙が弾幕を放ち、星羅の弾幕に当たろうとした瞬間：

「掛かった！」

「なっ!?!」

…弾幕が少し小さく分裂した。

「くっ、」

魔理沙は弾幕を避け続けるが人魂は何処までも追いかけてくる。

「くそっ！何処まで追いかけてくるんだよ！これでもくらえ！恋符『ノンディレクシヨナルレーザー』！」

魔理沙から十字レーザーの弾幕が星羅の人魂をかき消した。

「やるな、これならどうだ！斬撃『魔斬』！」

星羅は次に魔理沙がいる方向に向かって連続で足を振りかぶり真空波を繰り出す。

「へっ！そんな攻撃私の十八番で一緒に吹き飛ばしてやるぜ！くらえ！恋符『マスター

「よく考えて技を使った方がいいぜ。」何を言つて……………まさか!」

魔理沙はとつきにうつのをやめ回避に専念した。

「……………今の技おそらくだが魔力でできている物なら何でも切れるんだろう?」

「よくわかったな、そのとうりあの技は魔を切り裂く。普通のものでも切れるぞ。」

「やっぱりか、なら次こそ吹き飛ばしてやるぜ!」

「こつちも火力で勝負だ!」

『恋符(星符)』

『『マスタースパーク』くらえええええええ!』

『『スターライトパニツシヤー』でりやあああああ!』

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ

「はああああああ(うおおおおお)」

魔理沙と星羅のスペルがぶつかりあい凄い衝撃波が生じた。

「くうううつ!」

魔理沙が若干押されているようだ。

「!出力最大!はああああああああ!」

「う、嘘だろ!?!うわああああああ!?!」ピチューン

勝負は星羅が勝ち星を挙げた。



## 第5話 人里とバカルテット+α

魔理沙との勝負に勝利してから3日がたった。

最近までは、神社の掃除や家事全般の手伝いをしていた。(正確には、やらされた)  
今日は、幻想郷の地理を、買い物に行くついでに教えてもらう。

「星羅、さっさと準備しなさい。置いてくわよ」

「ちよつと待ってくれよ。道を知らないんだから。」

星羅は、急いで準備をした。

「博麗神社の階段を降りて、右に進んで行くと村が見えるからそこが人里よ。妖怪がたまにでてくるから気おつけてね。」

「ああ、わかった。」

「さてつと、ついたことだしさっさと買い物すまして帰ってお茶にするわよ。」

星羅達が入里の八百屋に向かっていると。

「ん？あの羽は……、なあ霊夢、なんで人里の中に妖精がいるんだ？」

「ああ、そのこと。この人里の守護神である上白沢 慧音ってやつがね、比較のおとなしい妖怪や妖精をまねいて人間の子供と一緒に寺子屋つてところで勉強を教えるの

よ。」

「へえ、そうなんだ、じゃあここに居る大人は、おとなしいからつてあんなことしていいのか？」

星羅が指差した方向には妖精2人と妖怪3人を囲む大人がいた。

「あ、あの、どいてくれませんか……？」

「どいてもいいが先に俺たちと楽しいことしようぜ。」

「ああ、やめられないくらい楽しいことだぜ。ゲへへ」

「うっさい！あたい達は、急いでるんだよ！さっさとどいてよ！」

「早くどいてくれないのか？寺子屋にいそいでるのだ！」

「早くどいてくれないと鳥目にするわよ！」

「みすちー、人里では、むやみに攻撃は、だめだよ？」

「そうだけお嬢ちゃん達、だからさっさと俺たちについてきな。」

「慧音先生には、俺たちがいつとくからよ。」

「お前優しいなw w」

あの5人は仮の名前としてゲスーと5と呼ぼう。

「……はあ、妖怪や妖精を助ける気には、なんないんだけどねつて星羅、待ちなさい！」

「なあ、あんたら、その子達嫌がつてるんだろ。さっさとどいたらどうだ？」

「ああん？野郎には、興味ないんだよ。さっさとどっか行きな」

「そうそう、さっさとどっかいったほうがいいぜ。」

「はあ、しようがないなあ、あまり手荒な真似は、やなんだけどな」

「てめえ、なにブツブツ言ってる！」

そう言った瞬間、星羅は、ゲス1とゲス2の頭を掴み地面にぶつけた。

『グボア!!』

「て、てめえ……………！死ねやゴラア！」

ゲス3は、懐からナイフをとりだし星羅に向かってふりかぶり、振り下ろした。そのナイフは、星羅に————

「全く、危ないじゃないか。」

————当てることはなかった。星羅が中指と人差し指でナイフを挟んで止めたからである。

そのまま星羅はナイフを持った男の足を払い落ちてきたところに膝蹴りを食らわし、殴りかかってきたゲス4と5を避け回り込み、片方をかかと落とし、もう片方をどう回し蹴りで気絶させた。この間、5秒!!!

『グハア!』

「はああ——————よっ。」



「よし。じやないわよおー！」バシィィィィン

「痛あああああああああ」

「あんたなにかんがえてるのよ！いきなり突っ込んでくなんて！」

「いいじやないか気絶させたんだし。」

「あんたねえ……」あ、あの、霊夢さん」ん？あら大妖精じやないそれにバカルテット一同。」

『誰がバカルテットだ!!（なのかー!!）』

「助けて頂き有難うございます。」

「いいつての、助けたのは、星羅だし」

「星羅さんですか……、知らないのに助けていただきありがとうございます。」

「いやいや、大したことはしてないよ。ただこまっていたからね。それより君は？」

「あ！すみません。大妖精って言います。みんなには大ちゃんって言われています。」

「あたいは、チルノ！よろしくね！」

「私は、ルーミアなのかー」

「私は、ミステイア・ローレライ。みんなからは、みすちーってよばれてるは、竹林でお店をやつてるから暇があつたら来てね。」

「僕は、リグル・ナイトバグ。こんななりだけど女の子だから、みんなは、リグルってよ

んじろよ。」

「そうか、俺は東風谷 星羅、女みたいな容姿だが男だ。」

「そうですか。貴方も同じ様に間違えられて……………」

「わかつてくれるか、リグル……………」

星羅とリグルは、仲良くなれそうさだ。

「おーい、お前達ー！大丈夫かー！」

「あつ！慧音先生！攫われそうになったところを霊夢さん達が助けてくれたんだす。」

「そうか、すまなかつたな、霊夢。迷惑をかけてしまつて。」

「いいのよ別に、正確には、助けたのは、星羅だし。」

「星羅？」

「ああ、自己紹介が遅れたな。東風谷 星羅って言います。」

「おお、そうか、ありがとう。お礼に昼食をご馳走しよう。」

「ありがとうございます。」

~~~~~おまけ~~~~~

「あいつらは、どうするのかしら？」

「とりあえず、頭を地面にめり込ませとけばいいだろ。あとで説教だ。」
お、恐ろしすぎる……………

第6話 幻想郷の地理

「さあ、着いたぞ。ようこそ寺子屋へ、みんなは、教室で待っていてくれ。」

寺子屋は、木材でできた普通の小屋のようだった。しかししっかりと出来ているため、なみの攻撃では壊れなさそうだ。

『はい（なのかー）』

「私達は、どうすればいいのかしら？」

「霊夢と星羅は授業を見学するか休憩室で待っているかしてくれ。」

「じゃあ、俺は授業を見学させて貰おうか。」

「私は、買い物して先にかえつとくからね。……………そうだ！慧音に地理を教えるもらったら？慧音はそこんとこ詳しいし。」

「それは、大丈夫なのか？」

「私は別にいいが？」

「それでは、お願いします。」

「それじゃあ慧音、頼んだわよ。」

そうゆうと霊夢は、八百屋がある方へと去っていった。

「それでは、教室の方へと案内しよう。ついていてくれ」

~~~~~少年&女性移動中~~~~~

「さあ、着いたぞ、早速入ってくれ。」

慧音の後に続いて入ると、教室内は、子供達の活気のある話し声が聞こえてきた。

「みんな！静かに！今日は、紹介したい人がいる。チルノや大妖精は知ってると思うが、今日1日授業を見学する事になった東風谷くんのだ。」

「皆さんこんにちは、東風谷 星羅です。今日1日授業を見学させてもらいます。何か質問がある人は、いますか？」

「はいはい！」

「確か、チルノだっけ？何かな？」

「けーね先生と星羅は付き合ってるんですか？」

「なっ、なっ、なっ、何を言っているんだチルノ！」

「付き合っていないぞー。チルノー。人と人の関係は気安く聞くもんじゃない。」

「そうだとチルノ。お前は後で、少しお話が必要だなあ。」

ゾクツツツと背筋が凍るような感じがしたと思ったら何故か慧音先生の背中に阿

修羅の様なものが見えた気がした。

「チルノ、ドンマイ。」

この時のチルノの顔が

?。(。D。)↓Σ。(。D。111)↓(((;。D。)))))

こんな感じだ

「すいません。あたいが悪かったです。大人しくお仕置きを受け入れます。」

「よろしい、それでは授業を始めよう!」

この後、授業は、何事も無く事を終えた。

(その日チルノの叫び声が聞こえてから人里のみんなは、慧音先生に恋愛関連は、聞かなくなつたのはまた別のお話)

「けーね先生!せーら先生!バイバーイ!」

「ああ、気おつけて帰れよー」

「すまないな、東風谷くん。迷惑をかけてしまつて、それじゃあ教えるからこつちに来てくれ。」

~~~~~少年女性移動中~~~~~

「さてと、先ずは、何から教えようか。それじゃあ人里を中心にして教えようか。」

まず、この人里から北に進んでいくと霧の湖と言うところがある。ここは、チルノ達などの小妖怪や妖精などがよくここで遊んでいるな。次は博麗神社だな。ここは、知つての通り霊夢が住んでいて、幻想郷を覆っている博麗大結界の維持を行ったり悪い妖怪などの撃破を受け持っているんだ。ここは、東風谷くんが人里に来たとうり、石段を降りてから右に進んで行くとこのとうり人里に着く。」

「へへ、霊夢って結構重要なことをしているんだな。」

「話を戻そう。」

知っているとと思うが人里には、東西南北に出入り口がありそこを北に出て行くと太陽の畑と言う所がある。ここは、向日葵と言うでかい花が大量に咲いているからすぐわかるだろ。くれぐれもここには、行かないほうがいい、ここには、風見 幽香と言う大妖怪が住んでいて、霊夢でも苦戦するほどの強さだからな。他にも幻想郷には、迷いの竹林や妖怪の山など、マヨヒガ、魔法の森がある。この中でも迷いの竹林や妖怪の山も太陽の畑同様行かないほうがいい。迷いの竹林は、とにかく迷う。案内人が居ないと二度と出られない可能性が有る。無闇に行かないほうがいい。」

「飛んではいけないのか?」

「入る前にならないが、入ってからは、飛んで外に出ようとしても、いつの間にか地上に

立って入るんだ。

次は、妖怪の山だな。ここは、鴉天狗、白狼天狗、河童などの妖怪が多数存在する。ここに行かないほうがいい理由だが、白狼天狗警備隊が常に妖怪の山周囲を警戒しているんだ。見つけ次第侵入者として倒そうとしてくるからな。

こんぐらいかな？あとは、東に青龍、西に白虎、南に玄武、北に朱雀が入るくらいかな？この4神に危害を加えようとするなら消し炭になりかねんからな。」

「そうか、ありがとうございます。慧音さん。」

「いやいいんだ。こつちも生徒が世話になったからな。せつかくだし夜も奢ろう。」
「ありがとうございます。」

~~~~~時間は、進んで次の日の朝~~~~~

「さて、あんたが幻想郷の事にも詳しくなつたところで始めましょうか。」

「なにをするんだ？」

よからぬことを企んでいるな、霊夢め。

「もちろん、あんたの修行に決まっているじゃない。あんたには、魔理沙に勝つほどの実力があるんだから。これからの妖怪退治や異変が起こったりした時に協力してもらう



んだから。」

「はあ……やっぱりよからぬことだったな。」

## 第7話 九ノ属の剣、妖を断ち切る刃となれ

皆様、朝の人は、おはようございます、昼の人は、こんにちは、夜の人は、こんばんわ。東風谷 星羅でございます。

修行するぞと言われた日から1年ほどたつて、今は、夏の時期。今日は、霊夢と一緒に妖怪退治をする事になっていきます。

ちなみに、霊夢の修行と言う名の地獄を味わわれて、そのおかげで中級クラスの妖怪なら単独で撃破できます。

「星羅ー、読書への説明はいいから。準備はできたかしら？」

「霊夢、めたいぞ。あとすまない、少しだけ時間をくれ。」

「わかったわ、なるべく早くしてね。外でまってるから。」

「ああ、わかった。」

さて、霊夢を待たせるのも悪いんで、早くしますか。

そう意気込んで準備するはいいがそこまで待つていく物は、ない。せいぜい、霊夢に教えてもらった（正確には、教えられた）札を数枚と傷治しと人里で買った形状が刀に似た剣ぐらいかな？あとは、なにかー

「ちよ、ちよつとなによこれ!？」

霊夢が騒がしいな。なにかあったのか？

「霊夢、どうしたんだ大声で叫んで。」

「どうしたも何も、外に出たらなんか剣が刺さってるし、抜こうとしても硬くて抜けないのよ!？」

なに？剣だと？

俺は、そお思いながら霊夢の後ろを見てみると確かに剣が刺さっていた。しかも――

「刀、だと?？」

そう刺さっていたのは、刀なのだ。人里の刀よりも美しい光を放つ。かなりの業物だ。

「星羅も抜いてみたら?？」

「そうだな。抜いてみるか。」

そう言い刀の柄を持ちおもいきり引き抜いたら――

『あ?』

なんと、刀が抜けたのだ。しかもさつきまでは、無かった鞘に収まった状態で。

「その剣……刀とか言ったわね。すごい霊力と魔力をかんじるわ。本当なら私が欲しい

とこだけど貴方に上げるわ。」

「ありがとう、霊夢、もう準備が出来たから早速仕事に……!?グツ!?なんだこの頭の痛みは、頭の中に何かが流れ込んでくる!?!」

これは、この刀か?

「九ノ刀 無零

九つの属性をその身に宿した神より創り出された剣。主の意のままに焔、流水、嵐風、雷灰、壁土、常闇、光 聖、絶対零度、絶無を操る。時に聖剣として、時に妖刀として、その力を発揮する。永久不滅、壊れる事を許されない剣、か………」

「貴方大丈夫? 今回の仕事休んだほうがいいんじゃない?」

「大丈夫だ、問題無いよ霊夢。」

「そう………ならいいわ、くれぐれも無茶をしないようにね。」

そう言い俺たちは、妖怪の山の麓付近に行った。

~~~~~移動中う? そんなもんわ最初っからなかつたんだよ~~~~~

「あつ! やつとききました! 霊夢さーん! こっちでーす!」

「待たせたわね、文に権。」

彼女達の名前は、白い犬耳がついているのが犬走 椛。黒い翼が目立つのは射命丸 文

「いえいえ、そこまで待つてはいないんで、ところでそちらの方は？」

「確かに見ない顔ですね。今日幻想郷に来たんですか？」

「いや、1年前ぐらいからこつちにいたな。そう言えば、自己紹介が遅れたな、東風谷 星羅だ。よろしく。」

「1年前!? あやや、私が気づかないとは、まだまだですね。私は、清く正しい射命丸 文ですーあとでインタビューをさせてもらってブヘラア!？」

「五月蠅いから先輩は、黙つて下さい。私は、白狼天狗警備隊の隊長、犬走 椛と言います。」

「警備隊か……、問答無用に斬りかからないんだな。」

「それは、一部の新人だけです。直そうとしても直らないから、めんどろなのです。」

「自己紹介が済んだらさっさと行くわよ。」

「あ!置いてかないでください (泣)」

移動中の山道で今回退治する妖怪について聞いて見ると。

・教えてもらった情報は、

・相手は、中級クラスの妖怪。

・ 1 人質を取られてるため無闇に動けない。

・ 斬ろうとしても硬過ぎて斬れない。

・ スピードは遅い。

以上の情報が手に入った。

「人質が取られてるのねえ、」

「人質の件は、俺が行こう。」

「それじゃあ、その後私が吹き飛ばして、一旦距離をとると」

「それでいこう、……つとついたようだな。作戦開始だ！」

その頃、退治対象の住処内では、

「くそ！ 離せ！ この！」

「がっははは、無駄無駄、誰も助けに来ないよ。」

「必ず隊長が助けを呼んできてくれる！ そうなったらお前の負けだ！」

「そうかいそうかい、じゃあせいぜい思っとくんだな。」

がっはははと妖怪が笑って目を離した隙に、

「よそ見していいのか？」

能力で一瞬のうちに人質を抱え星羅が入り口付近に立っていた。

「なにい!？」

「星羅！どきなさい！霊符『夢想封印』！」

ドガガガガガガガガ

霊夢の放ったスペカが妖怪を吹っ飛ばした。

「やったかしらって、きゃあ!？」

「霊夢!？」

気を抜いたせいで、近づいている岩腕に気づかず。霊夢が人質に取られてしまった。

「くつくつく、さつきの一撃は、効いたぞ。だが、あと少し火力がたらんかったな。この小娘が返して欲しければその場から動くなよ。」

「くつ、ぐはあつ、ぐほおつ、ぐあつ、」

一発、二発、三発岩腕が星羅を殴る。

「がっははは、言い様だのう。」

「星羅！私に構わずこんなやつ潰しちやいなさい！」

「口の減らない小娘だの。」

そう言い妖怪は、手の力を強めた。

「があつ……………、ああああ」

ボキボキと嫌な音が周囲に響き渡る。

「霊夢を傷付けるのをやめろ……………」

「ああん？聞こえんなあ！」

「霊夢を傷付けるのをやめろって言ってんだよこの糞妖怪がああああ！」

瞬間、星羅の目と髪の色が赤くなり。

「焰の意志よ、主の言葉に答え、対象の敵を吹き飛ばし、炭とかせ！焰波上飛！」

焰の衝撃波が妖怪を遅い霊夢ごと吹き飛ばす——

「え？」

——はずだった。焰は、霊夢を避けるように妖怪に当たった。

「まだまだ！絶対零度の意志よ、主の言葉に答え、対象を凍てつく氷へ閉ざせ！氷結監獄——」

星羅が刀を地面に突き刺した瞬間、妖怪を囲むように覆い氷漬けにした。

「嵐風の意志よ、主の言葉に答え、対象を遥か彼方へ舞あげろ！天空飛翔！」

強烈な風が氷漬けの妖怪を吹き飛ばした。

「これで最後だ！雷灰の意志よ、主の言葉に答え、対象に滅殺の雷を！雷剣翔灰！」

雷が剣を纏い星羅が居合術の構えに入る。

星「銘仙流居合、瞬の型、雷鳴雪月花ああ！」

スパアアアアアン

氷が砕け中から妖怪が出てくる。しかし妖怪の下半身は、ボロボロに引き裂かれてお

り、立つことは、不可能だろう

「この私が死ぬ時がくるとわ、だが置き土産をくれてやろう、くらえ！ 儂特製の毒岩だ！」

「ぐはあ、」

毒岩は、見事星羅の腕にヒット

「その毒は時期に回る。回ったら最後、助かる術は無い。」

「くっ、常闇の、意志よ、主の言葉に、答え、対象を、痛みなく切断、しろ、闇刀無斬。」

星羅は、自分の腕を肩から斬り毒が回る前に切り離した。しかし血は出ておらず黒い靄が掛かっている。

「はあはあ、光聖の意志よ、主の言葉に答え、対象の部位を癒せ、祝福創復。」

星羅の肩から下が光ったと思うと血が出ておらず断面が見えた肩から下がある星羅がいた。

「もう、限界だ、」

そこで星羅の意識は、ブラックアウトした。

二章 紅く染まりし狂気の幻想

第8話 紅き幻想に悪魔は降り立つ 前編

―ここはどこだ

―確か俺は

―あの妖怪をあの剣で

―だれ?

「思い出したかい？」

「僕は、君を―――よ―――者。

君の―――あと―――すぐだから

い―――、君を―――る者の―――

へと―――ぐ―――だ」

お兄ちゃん！お兄ちゃん！

―誰かが呼んでいる

起きてお兄ちゃん！

―あそこにある光から聴こえる

死なないでお兄ちゃん！

―身に覚えのある顔、聴いたことがある声

お兄ちゃん、ひぐう、いやだよお、お兄ちゃん

―行かなきゃ、待っている。早く、もつと早く！

「……………博麗神社か。」

「え？せ、星羅？」

「霊夢か、済まないな。謝って済むことではない事は、わかっているが。」

「許すに決まってるじゃない。貴方は、私を守ってくれたのよ？なんで許さないの？私は…………許すわよ。」

「霊夢……………ありがとう、」

「もう少しこのままでもいい？」

「ああ、いいよ。」

2人は、夢の中へと――

ダダダダダダダダダバン!!

「霊夢! 大変だ!」

「……旅立ってなかった。」

「魔理沙く煩いわね」

「そんな事言ってる場合か!? 空が紅い霧に覆われ始めてるんだぞ! ゆっくりしていられるか!」

「……………なんですか? 紅い霧? そんな物昨日までなかつ「これを見ろ!」 たって、何これ……………」

「おいおい、まじかよ、俺が怪我で動けねえのに」

「2人が見たものは、紅い霧に覆われた幻想郷の姿だった。」

「面倒くさい事になったわね、星羅、いつてくるわ、ちゃんと待っててね。」

「ああ、帰ってこいよ、霊夢。」

「行くぜ霊夢!」

「ええ、そうね。」

『異変解決へ!!』

一日主人公視点アウト

霊夢視点

異変解決って言ってでてきたは、良いけどどこにあるのかしら？

「霊夢ー、どこに行くんだよー」

「やっぱ勘だよりかしらね、こっちに行くわよ魔理沙！急ぐわよ！」

「あ！霊夢までよー！」

「貴女たちは、食べていいじんるってわー！引かれたのか？」

「？なあ霊夢、今何か引かなかったか？」

「気のせいじゃないかしら？」

「そこのお前たち！」

「それにしても霧が濃いわねわー」

「おい！無視をするな！こっちを向け！」

「ああもううるさいぜ！恋符『マスタースパーク』」

「キヤアアアアア！」

「チ、チルノちゃん！」

「あんた、あまり妖精いじめると星羅に追いかけるわよ。」

「え!?まじで!?!」

くくくスキップと言う名のすつ飛ばしくくく

今何か変な物が見えたけどメタいから言わないでおくわ。

しかし、異変の中心らしき建物にきたは、良いけどこれは、

「痛いわね。」「痛いな。」

真つ赤な建物は無いわね。目に痛いわ。

にしても、あそこにある門の前に居るのは門番でいいのかしら？寝てるんだけど。

「ぐううー、すびー、ぐううー、すびー、……はっ！また寝てしまった！咲夜さんに怒られるうどうしようー！」

「……………」

「ああもうこうなったら覚悟をき……め……！」

目と目が合う、瞬間♪ー

「し、侵入者！紅魔館門番紅 美鈴いき「マスタースパーク」ますって、せめて最後まで
いわせてよー（泣）」

ドカー……

ー吹き飛ばされたー♪

「魔理沙あんた、なかなか酷いわね」

「咲夜？確かあの門番が怒られるとかいってたわね。」

「またあの子は……………、まあ今は、どうでもいいわ、それじゃあ貴女には、ご退場ねがいますか……………ね！」

私は飛んで来た一本のナイフを避けようとした。瞬間、相手の顔がにやけたような気がした。一瞬、そつちに意識向けた時ナイフの量がありえない程の量になっていた。

「なっ！なんでナイフが一気に増えてんのよ！」

（くっ、ナイフがふえた？増加系の能力？その可能性は、あるけどまさか、ナイフを出現させる？ナイフを操る？いや、そんな能力ならわざわざナイフなんて投げないはず。

それならなんで？）

「よそ見していいのかしら？」

「はっ！くそっ！」

一瞬にして後ろに回った咲夜に霊夢がお祓い棒を回すが軽々と避けられる。

（やばいわね、こうなりやあれをつて、うん？あの時計は？

時計……………不自然なナイフの増加……………まさか！）

「あんた、咲夜とか言ってたわねあんたの能力。時を操る能力ね？」

「良くわかったわね、そのとうり私の能力わ、『時を操る程度の能力』やっぱ使いやすいと言う理由で時計を使うのは、失態だったわね。」

第9話 紅き幻想に悪魔は降り立つ 中編

「なっ！くっ、時よ止まれ！」

咲夜は、札を避け霊夢を探そうと足を踏み——

「こ、これは！う、うごけん！」

——出せなかった。

「やっと掛かってくれたわー、正直、引つかかるまでにどんだけ時間をかけるのやら。」
やれやれといった感じの霊夢に向かって咲夜は、ナイフを投げようとするが引いた腕が何かにひっかかる感じがした。

「なっ、なにい！」

「ちよつとテンパリ過ぎじゃないかしら？よく周りを見たらわかることよ。」

「こ、これは!?!」

咲夜の周りにはおびただしい数の札が結界のようになっていた。

「くそ、くそ、時よ止まれ！なんで、なんで動けないのよ！」

「そろそろ、終わりにさせてもらうわ。宝具『陰陽鬼神玉』はあああああああ！」

「がっ、はっ、あああああああああ」

「なかなか強かったわよ、でもね、こつちには、守るものがあるの。それを守る為に私は、闘う。どれだけ相手が強くてもね。」

「くつ、負けてしまった。約束は約束。博麗の巫女よ、付いて来い。」

待つててね星羅、私が必ず異変を解決するからね。

霊夢視点アウト

魔理沙視点

霊夢と一旦別れた私は、この目に悪い、確かあの門番は、紅魔館って言つてたな、通路を進んでく私の前に大きな扉が現れた。

「なんじゃこりゃー………でかすぎだぜ………これはお宝の予感！早速突撃だぜ！」

ギギギギイイイ

「お、おとおお。本の宝庫だー！珍しい魔道書やら色々本があるぜー！色々借りてこーつと♪」

私が上機嫌で本を鞆に入れてくと、

「こらー！かつてに本をもつていくんじゃーない！」

「んー？誰だ？」

「貴女こそ何なんですか!?!私はこの図書館の秘書をしている小悪魔です！」

「私か？私は霧雨 魔理沙！普通の魔法使いだ！」

「パチュリー様と同じ魔法使いだ、と?! こんなんが魔法使い!？」

「こんなんとは失礼な、私は列記とした魔法使いだぜー」

「列記とした、ねえ、」

「今度は、誰だぜ!」

「あ! パチュリー様! こんな侵入者及び泥棒なんて、さくつと倒しちゃいましょうよ。」

「そうね、貴女に選択肢をあげる。鞆の中の本を返して倒されるか、鞆の中の本を返して帰るか、選んで頂戴。」

「へっ、名も知らない奴のさしずなんか受けるかよ! 私は、鞆の中の本を返さずにお前を倒して、異変を解決するんだぜ☆!」

「そう、異変を解決する、ねえ、レミイの邪魔をするんだったら私の敵よ。私の名前は、パチュリー・ノーレッジ。魔法の本当の力見せてあげるわ。」

「そう簡単にこの霧雨 魔理沙様が負けるかよ! 行くぜ! 先手必勝、星符『メテオニツク シャワー』」

「そんな攻撃、当たるとでも? 日符『ロイヤルフレヤ』」

な、こいつメテオニツクシャワーを相殺した!? あのスペカは、火力ある方だぞ!

「負けられつかよ! 恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

「金符『シルバーごほっドラごほっごほっゴン』やばい喘息が。」

「！チャンス！恋符『マスターズパーク』」

「キヤアアアアア」

「パ、パチュリー様、だ、大丈夫ですか」

「大丈夫な訳無いでしょ、助けなさいよ」

「私の勝ちだな！本わ借りてくぜ！私が死ぬまでな！」

今日は、良い収穫だぜー♪

魔理沙視点アウト

霊夢視点

この咲夜とか言う奴に案内させてるけど本当につくんでしょね。

「お、霊夢ーっておわ！いきなりナイフ投げんなよ！」

「咲夜、やめなさい。魔理沙は私の仲間。させないわよ。」

「こんかいは、許しましょう。」

そんなこんなで大きな扉の前に着いた

「此方にお嬢様がおられます。それでは、ごゆっくり」

ギギギギイイイイ

「あら、咲夜。負けたら通すように言っただけど本当に負けたのね。」

そこにいたのは玉座に座った幼女だった。

『幼女ね……（幼女だぜ……）』

「何か言ったかしら？」

「いや、別に。あんたがこの異変の主犯？ そうならさっさと戻しなさい。面倒なのよ！」
「残念ながらそれは、無理ね。私の目的のためにこの霧は必要なの。申し遅れたけど私は、紅魔館の主レミリア・スカーレットよ、博麗の巫女とネズミ」

「私はネズミじゃないぜ！」

「魔理沙がネズミな事は置いといて」「置いとくな！」うるさい！ さっさと決着つけて消させてもらうわよ！」

「いいわ、遊んであげるわ。」

「行くわよ！ 魔理沙！」

「言われなくても」

霊夢視点アウト

霊夢達がレミリアと対峙したところ……

毎回毎回お姉様ばっか。

皆んなお姉様お姉様、誰も構ってくれない。

もうこんな世界いらない全部ぜんぶゼンブ

こわして、コワして

コワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコ
ワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシ
テコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテコワシテ
コワシテやるんだから

霊夢達がレミリアと対峙したころ……

ここわざこだ。

俺はあの後眠って、

お、起きた起きた。

この声は、あの時の

覚えてくれて光栄だね、

君はこんなとこにいていいのかい？

守りたいものがあるんじゃない？

腕の事なら心配いらないよ、

さあ、行くんだ！

後もうすぐで全てがわかる

ああ、俺は、守る者の為に
この力を
振るう

さあ、行け、東風谷 星羅
私はきみを待っているよ

第10話 紅き幻想に悪魔は降り立つ 後編

「……………あの夢は、一体……………!?腕が……………治って、」

霊夢には、待つててと言われたが、なんか嫌な予感がする。急いで追いかけよう。

「さてと、準備はつて、何で準備してあるのかさっぱりだな。やっぱりあの夢が関係してあるのか?まあいい、今は、追いかけるか……………」

~~~~~大空滑空中~~~~~

「いや〜涼しいの……………。ん?何であんな所にルーミアとチルノと大妖精が?」

「あれ?星羅先生じゃないですか、怪我をしたつて聞きましたが治ったんですね。」

「まあな、それにしてもなんでチルノとルーミアは、いじけてんの?」

「実は……………、カクカクシカジカです!」

「何処でそれしつたし。……………おいとくか。で、ふむふむなるほど、翻訳すると、ルーミアは魔理沙に無視された挙句、吹き飛ばされ、チルノは魔理沙に理不尽なマスパをくらったと。後でO☆HA☆NA☆SIだあ。」

「先生……黒いですよ。」

「おっと、すまない。チルノとルーミアにはこれを渡しといてくれ。俺は、急いでるからじゃな！」

「はい！お気をつけて！………チルノちゃん達！これ食べて元気出して！星羅先生から渡されたんだ！」

「元気出してくれるといいんだけどな、まつ、いつか！そんな事より急がないと！」

~~~~~盗んだバイクで走り出す~~~~~

（走ってません）

「………ここであつてると思うけど、これは痛いな。」

しかも門壊してるし、この壊し方は絶対魔理沙だろ。

「入ろっ!？」

ビイユン!!

「よく避けましたね。あの魔法使いには、不意打ちをされましたが、次はそうは行きませんよ」

「やっぱり魔理沙か……。それよりも、お前武闘家としては、中々の強さだな。名は？」

「私の名前は、紅 美鈴。この紅魔館の門番及び太極拳の使い手でもありません。ここは一つ、武闘だけで勝負をしてみませんか？ 貴女も中々の使い手の様で。」

「いいぜ、後、俺は男だ。」

「これは、失礼。では……紅魔館門番、紅 美鈴！」

「銘仙流使い手、東風谷 星羅！」

『いざ、尋常に！』

勝負!!』

やられる前に仕掛ける！

「銘仙流戦闘術、臨の形、翔破烈拳！」

「速いですが、まだまだです!!降華蹴！」

星羅が上へ吹き飛ばそうと突きを放つが、それを美鈴はカウンターで蹴りを放つ。

「そう簡単にやられるかよ！」

星羅は、突いた体勢から身体を捻り無理やりガードした。

「やりますね。ですが！天龍脚」

「虎の形、虎高水脚」

ドンッ、ドンッと衝撃波をだしながら二人は尚も続ける。

る……………美鈴！飛んでいくぞー！」

「え!?ちよつとまっつてくださーい！飛ぶの苦手なのに〜」

(霊夢、魔理沙、待つていてくれすぐにおいつくからな！)

星羅視点アウト

星羅が起きた時……………

「速攻できめるぜ！魔符『ミルクィウエイ』」

「その程度で「余所見は、厳禁よ！魔符『封魔陣』」ちつ、面倒な！天罰『スターオブダ
ビニア』」

ガガガガガガガガガ

「威力ありすぎじゃない？当たったらひとたまりもないわね。」

「あ！いい事思いついたぜ！霊夢！ゴニヨゴニヨゴニヨゴニヨ。」

「なるほどね…わかつたわ、それでいくわよ！」

「お喋りは終わったかしら？」

「ああ、終わったぜ。お前を倒す作戦もな！魔符『スターダストレヴァリエ』」

「調子にのるなよ人間風情が!!紅符『スカーレットシユート』」

ドカァン!!

第11話 狂気を超えろ!

(俺は今、何をしているんだろう)

「よくも、よくも星羅を!」

「アハハハハ、お兄サンも脆いね。ツギは、オネエさんたちが相手?」
(フランと戦闘を開始して、)

身体の半身を吹き飛ばされた。

時は、数分前にさかのぼる。

~~~~~

「お兄サン、コレはどうかな? 禁忌『クランベリートラップ』」

「中々密度が濃いな、だがこの程度の速さなら避けれる!」

「ムー、なか中ヤルね。次ハこれダよ? 禁忌『フォースオブアカインド』」

次の瞬間



「おいおい、4人に分身ってありかよ。」

「アハハハ、これでモツとタノシメルネエ！」

「くそ！ 霊符『陰陽神霊斬 連』」

「オソイよおそい〜アタラナイヨ。」

霊力を纏った斬撃を連続で放つが、全て避けられる。

「ならこれは、どうだ！ 神霊『神・速・爆・斬』」

「オ？ オ？ ハヤクナツタね、でも……………ユダンスるノハ駄目だよ？」

「なっ！ しまった！」

「一気にスペルは、タエラレル？」

禁忌『カゴメカゴメ』、禁忌『恋の迷路』、禁弾『スターボウブレイク』、禁弾『過去を刻む時計』

「負けるかああああああ、大拡散『ブレイクスタープレッシャー』」

星羅が極限まで密度を上げた弾幕を全方向に打ち出しフランガ放った弾幕を打ち消して行く。

「いまだ！ 速符『ラストスピード』」

星羅が使ったスペル、ラストスピードは、足に風を纏い弾丸状の風の塊を撃つのだが、



「かはっ……！」

「くそお、私達は、敵討ちも出来ねえのかよ！」

「オネエさん達弱いね、ソロソロ、オワラシテアゲル」

（俺の力は何のためにある。仲間を、大切な物を守るため。）

（霊夢を、魔理沙を、人里の人達を、紅魔館の皆んなを、）

「禁忌『レーヴァテイン』」

（チルノを、大妖精を、ルーミアを、みすちーを、リグルを、）

「星羅、ごめんね、」

（この幻想郷を、そして、）パキパキパキッ

「フラン！やめなさい！」

「妹様！おやめくください！」

「霊夢！避ける！」

（大切な妹、早苗を守るためだ!!）

「オワリダヨ」

「（星羅には、私のこの気持ちを伝えられなかった。）せめて……最後まで……は、星羅と一緒にいたかったな。」

「だったら、さっさとこの異変を終わらせて家に帰るぞ、霊夢。焰『プラスターレーヴァア

「ティーン」

「ガキイイイイイイ」

「!!!!!!」

「アレエ?」

「え?」

「なっ!」

「嘘……」

「半身が吹き飛んでいたのに……」

上からフラン、霊夢、魔理沙、レミリア、咲夜の順だ

「星羅!」

「霊夢待ってる。フランを倒したら戻ってくる。こっちだフラン!俺がもう一回、相手してやる!」

「アハハハ、モウイツカイオニいサンが相手?こんどは、こわれなイデヨ!」  
物凄い勢いでフランと星羅は、紅魔館に空いた穴から外に出た。

ガキン、ガキン、ガキン、ギイイイイイイ

「キヤハハハハハハハハハハ、ヤルねモットタノシメルヨ!」

「自分の剣をよく見たらどうだ?」

「アレエ?炎がキエカケテルウ?」

「きずいたようだな。お前のその剣から出ている炎を吸収しているんだよ。」

星羅のブラスタレーヴァテインは、炎を吸収して自らの力に変えることができる大剣型の武器だ。この剣は星羅の力によって出来ている。本来、星羅の能力にはその様な力はないはずであった。今の星羅は記憶を全て思い出した状態なのだ。よって、星羅の能力は今『身体を強化する程度の能力』から『空想を現実にする程度の能力』になっている。

「キャハハハハ、ソウコナクツチャオモシロクナイネエ！」

「狂気『漆黒のレーヴァテイン』」

「……この力は………狂気のかか。なら俺も少し力を解放しよう。焰『ブラスタレーヴァテイン』+常闇『ダースインレイヴヘル』ダブルスペル！焰闇『レイヴァテイン』  
「ナアニソレエ？」

「これはスペルを二つ合わせて発動するスペルだ。まあ、使えるのは俺だけだが。」

星羅は無言が変化した二刀の黒い剣を持って更にスペルを発動する。

「新星『フェンリル』力を貸せ神狼！」

その時星羅の頭から狼の耳がはえ、更に尻の辺りから狼の尻尾が生え、髪の毛はシルバーに変化した。



これは……………フランの心の声か。

「……………」

『誰でもいい、私を助けて、』

「待ってるフラン。俺がお前を助け出す！」

ガキイイイイイイン、ガキン、ガキン、ガガガガガガガガ、ドゴン、ドガアアアアアアアアアアン。

「くっ、きりがない。」

「スゴイヨ、狂気『495年の漆黒波紋』

フランは、次々と技を繰り出しているが星羅は全て避けている。しかし、星羅は避けているだけで防戦一方。

「(こうなりやあのスペルを使うかな)」

「モウソロソロツマンナクナツタカラオワラセヨウヨ、キャハハハハハハハハハハハハハハハハハハ、狂気『セブンスオブアカインド』

「おいおい、強化されすぎじゃね。」

「コレデドウカナア？狂気『ヘルベリートラップ』、狂気『終わりなきカゴメカゴメ』、狂気『恋の地獄』、狂気『過去を消す悪夢』狂気『ダークスターボープレイク』狂気『カタディオプトリックシン』狂気『フォービドゥンスパーク』





「(なら交換条件だ。お前がフランの体から出て行く代わりに俺の体に入って、俺の魔力や霊力を喰らえばいい、その代わりにお前の力を扱わせてもらうがな。)」

(あら、中々いい交換条件ねいいわよそれで、それと私の名前は、狂魔 ミリアよろしくね♪)

「(俺は東風谷 星羅、よろしくミリア。)」

(名前で呼ばれたのは初めてよ、フフ♪)

「(そうか、疲れたから今はちよい眠るかな。)」

すでにスペルは全て解いており何時もの黒髪ロングに戻っている。

こうして紅魔異変は幕を閉じた。

めでたしめでたし。

## 第12話 紅魔異変その後

やあやあ皆さんおはようございます。星羅です。私は先々日紅魔異変を解決して、今日は宴会なのです！はい。何故私がこんな喋り方なのかと言うと、かなりテンパっているからです。なぜかって？それは……………

金髪の少女が隣で寝てるからだよ！

いやいやいや本当どうするよ！兎に角、起こすか。

「おーい、フラン起きろー。」

「ううん……………ふにやあ……………ん、あ、おはよう！お兄ちゃん！」

「お、お兄ちゃん!？」

「だってフランを助けてくれたんでしょ？だったらお兄ちゃんでもいい！それとも、駄目？」

幼女の上目遣い。どこでそんなの覚えた……………。

「うっ……………わかったよ、お兄ちゃんでもいいよ。フラン。」

上目遣いで見られたらOKと言わざるおえないぜい。

「それじゃあフラン、みんなの所に行こうか。」  
「うん！」

~~~~~少年幼女移動中~~~~~

「あら、フラン起きたのね。」

「お姉様おはよう！お兄ちゃんも一緒だよ！」

「貴方は……あの時はフランを助けてくれてありがとうね。私はレミリア・スカーレットよ。手助けがいる時は言いなさい、出来るだけ手伝ってあげるから。お兄様。」

「俺は、当然の事をしたまでだ。東風谷 星羅だ、男だからな。それとレミリアはお兄様なんだな。」

「あら、いやかしら？フランのお兄様なら私のお兄様でもあるのよ？それに男だつてことは、知ってるは。私も最初は、お姉様かと思つたわよ。」

「うぐつ」

「私も最初は、お姉ちゃんかと思つたよ！」

「ぐはつ」

「うふふ」「あはは」

「俺で遊ぶのは止めてくれよ。」

「ごめんなさいね、咲夜も準備して有るから早く宴会会場に行くわよ。」

~~~~~幼女×2+少年移動中~~~~~

しつかし本当に広いな、この館。こんな館初めて見たぞ。てか異変の時壊れてるとこあつたよな。なんでこんな早く治つてんだろ？壁とかに自動再生でもついてんのかな？……………あながち、間違えでも無いかもな。

「お嬢様、妹様、兄様お待ちしております。準備は出来ているので、行きましょう。宴会場所は博麗神社で御座います。」

「なんで俺の事知つてて、更に敬語？しかも兄様で……………」

「兄様の事は巫女や白黒から聞いております。敬語なのは私がメイドであり、貴方様がお嬢様ですがお兄様としたつているからです。自己紹介が遅れました。私は紅魔館のメイド長をしている十六夜 咲夜と申します。以後お見知りおきを。」

「そ、そうか。それじゃあ行こうか。」

星羅は思った。この咲夜はメイドとしてパーフェクトに近いと、それに怒らせてはいけないと、特に一定の言葉を言うのは————

「なんか失礼なことを思いませんでしたか？星羅様。」

「い、いや何も思っていないぞ。」

「そうですか、なら良いです。」

~~~~~キング・クリムゾン  
!!!!!!~~~~~

「やっと着いたな。」

「はあ…はあ…、疲れたわ。」

「あわわわわ、パチユリー様ー！大丈夫ですかー！」

「お、紅魔館組も到着か。もう宴会は始まつてるぜ。」

「魔理沙か、酒飲み過ぎるなよ。」

「わーつてるって、星羅も飲むか？」

「一本貰おうか。」

「ほい、皆んなに挨拶でもしたらどうだ？慧音とか妖怪の山メンツも来てるし。」

「そうだな、ありがとな魔理沙。フラン、俺はちよつと皆んなに挨拶して来るからレミリアと待っていてくれ。」

「うん！わかったよお兄ちゃん！」

「ぜえ……ぜえ……見つけたわよ魔理沙。本を返しなさい。」

「それは無理な申し出だな」

「ムツキュー！（怒）」

「あはは……」

そんなたわいもない会話を聞きながら星羅は皆の元に歩いていった。

「さてと、慧音達は何処かなくなって、すぐ見つかったな。？見たことない人がいるな。誰だろう？」

星羅が歩いて行くと向こうから声をかけてきた。

「おつ、星羅君じゃないか、異変解決に協力したと聞いたがもう大丈夫なのか？」

「慧音さん、俺はもう大丈夫です。ところでそちらの方は？」

星羅が見る方には、腰まである白髪に赤眼、女性には、珍しい服装をしている。

「ん？私か？私は藤原 妹紅だ。よろしくな星羅。」

「何故最近名乗ってもないのに名前を知っている人が多いんだ……」

「あはは、星羅はここ最近幻想郷で有名なんだぜ？突如現れた黒髪ロングの中世的な顔立ちな男性、今回の異変にも関係している、博麗神社に住んでいる、あの新聞記者も気付かなかつた、挙げ句の果てには、侵入者を構わず斬る白狼天狗警備隊に信頼されてるとききた。これでしらないやつは、あんまりいないぞ。しかも人里には、お前のファンク

ラブまで出来ているぞ。良かったなw」

「笑い事じゃねえぞそれは……………」

「まつ、今後仲良くしようぜ！星羅！」

「ああ、よろしくな妹紅。」

あははと、笑いながら星羅と妹紅は色々な話ををして盛り上がったのはまた別のお話。

「さて、そろそろ次の所に挨拶に行くかな。」

「おう、またな星羅。今度はもつとゆつくり話そうな。」

「ああ、またな妹紅。」

妹紅にまたな、と声をかけた星羅は妖怪の山のメンツがいる方へと歩いて行った。

~~~~~移動中~~~~~

「……………」

星羅は無言になった。何故なら光景がえらい事になっているからだ。

「ちよつと飛ばないでください！先輩！」

「あははははははは、どうしました権い！そんなんでは当たりませんよ〜」

そんな光景を見ていると文の進行方向が此方に変わり突っ込んでくる。

「あつ！星羅さん避けて下さい！危ないです！」

「大丈夫だ、問題ない。……………文の頭にシユウウウウウウウウウト！「へぶし！！」超、エキサイティイイイイング！！！！」

ドゴオオン！

突っ込んでくる文に向かって星羅はボレーシュートの容量で文の頭に蹴りを放ち蹴りは見事に直撃し、文はいつの間にか空いていた障子から飛び出し爽快な音を立て吹き飛んだ。

「星羅さん、ご迷惑をおかけしました。先輩が星羅が来たから行って行こうとした所を私が迷惑だろうと止めようとしたらあの有様です。結局、迷惑をかけてしまいました。申し訳ありませんm（　　）m。」

「いやいや、問題無いよ。」

「はっ！私は誰、ここは何処？」

「何言ってるんですか。正気に戻りなさい。」

ゴン！

「ワプツ！痛たたたた、権いきなりたたかかないでくださいよ。」

「先輩が変なこと言うからいけないんですよ。」

「ええー……………つて、星羅さん！来たんですね！是非インタビューをお願いします！」



「あ、ああ、いいけど。妖怪の山のメンツも紹介してくれよ。」

「はいもちろん！名前から、特徴、スリーサイズまで何でもお教えします！」  
「スリーサイズは余計です！」

椀が顔を赤くしながら起こると。

「嘘ですつて〜椀〜、それにそんな貧相な身体なんて、「チャキ」嘘ですから抜かないでください。コホン！それでは質問をよろしいでしょうか？星羅さん！」

「いいぞー」

「では、まず。幻想郷にきた経緯から……………」

〜〜1時間後〜〜

「……………はい。これにてインタビューを終了します。ご協力ありがとうございました！」

「新聞に書くのはいいが、変なことは書くなよ。」

「わかってますつて〜、それでは皆さんを紹介しましょう。みなさーん！此方に来てくださーい！」

「なんだい、文。いきなり大声で私たちを呼んでさ。」

「にとりさん、実は皆さんをご紹介しようと思ひまして。」

「どうも、東風谷 星羅です。一応、こう見えても男です。」

「星羅？最近噂になつてゐる？」

「それ以外いせんよ……………」

「きゃー♪実は私たち人里のファンクラブに入つていて、秋 静葉と言います！握手して貰つてもいいですか!？」

「お姉ちゃん!?! 抜け駆けは許さないよ！私は秋 穰子と言います！わ、私もお願いします！」

「は、はい。良いですよ。」

きゃーきゃー♪と秋姉妹がはしゃいでいると、向こうから緑色の髪をした赤いゴスロリ?姿をした女性が歩いてきた。

「私は、厄神の鍵山 雛と申します。よろしくお願いしますね。」

「東風谷 星羅です、もしかして元は雛人形?」

「よくわかりましたね。そのとうり、雛人形であつた私は厄をその身に溜め込みすぎ今のような姿になりました。」

「そうですか。」

「いやー君は、すぐ皆んなと仲良くなれるね！これからもよろしくね！」

水色の髪で頭に帽子を被つて、リュックサックを背負つたツインテールの女の子。

「はい、えつと貴女は……………」

「おっと、自己紹介が遅れたね。私は河城にとり、幻想郷のエンジニアと言われている河童の一人さ。」

「河童ですか、皿は見えないんですね。」

「河童ってさー皿の水が干からびるとやばいじゃん？それで帽子を開発したのさ。それにスキマ妖怪にも色々開発してくれって頼まれてたからね。」

「そうなんですか。では、やっぱ胡瓜が好物で？」

「そうなんだよ！こんど河童の里に来るんだったら是非胡瓜を持って来てくれよ！それたら歓迎するよ！」

「わかりました。それでは失礼します。」

「じゃーねー！盟友！」

やっと挨拶が終わったよ。屋根にでも登って静かに飲もうかね。

## 第13話 後悔はしない

「ここは博麗神社の屋根の上。そこには、星羅が月を見ながら飲んでた。俗に言う月見酒と言うやつだろうか？」

「早苗……………元気にしてるかな。」

「ん？主人、その早苗って主人の大切な人なのかしら？」

「大切な人って言ったらそうなのかな、早苗は俺の妹なんだ。唯一、外で俺を慕い義理の兄妹でも一番愛してくれた。」

「……………もう会いに行けないのかしら？」

「(紫に頼めばいけるかもしれない。だが、また会ってしまったらもう早苗は俺を何処かへ行かせない可能性がある。こっちに呼び出すのはありだが、それであいつの生活を妨げる事になる。だから……………もう……………)」

「……………御免なさいね、変なことを聞いて」

「(いいんだ、もう。……………後悔はしていないから。)」

「……………なら、何故泣いているのかしら？」

「(え？泣いているのか？可笑しいな、もう後悔してないはずなのに。うう。)」

(私じゃそこんとこわかんないからそのメイドと考えなさい。)

「(え?メイド?)」

「あつ、兄様。」

そこには、レミリアの従者の咲夜がいた。

「……………咲夜か、何か用か?」

「なんか、すすり泣くような声が聞こえたので見に来たのですが、星羅様だったんですね。……………私で良ければ話して頂けますか?」

「……………」

「話したくなければ、話さなくていいですよ。無理に話せとは言いません。」

「……………話そう、だがこの話は皆んなには内緒にしてくれないか?」

「わかりました。この十六夜 咲夜、話さないと約束しましょう。」

「そんなかたくならなくていいんだけどなあ。」

星羅は、そんな事を呟きながら咲夜にミリアとの会話の事を大雑把に話した。もちろん、ミリアの事は黙ったぞ?言ったら面倒になるからな。いつかは話すがな。

~~~~少年☆説明☆中~~~~

「……………兄様は、此方に来た時元々記憶喪失だったんですね、それで今回の異変で記憶が全て戻ったと。」

「ああ、だからここで早苗の事を考えていたんだ。」

「その早苗さんは兄様の事を誰よりも愛していたんですね。」

「愛し過ぎてラブレターやら告白やらを全部断っていたんだけどな。」

あははつと笑っている

「それだけ愛しているって証拠ですよ。」

「そうだな。いやー！ 咲夜に話して正解だったよ！ 吹っ切れたよ。ふああ、眠くなつて来たな。」

「まだ宴会は、続いているのでここで一眠りしますか？ 毛布もありますし。」

「……………いいのか？ 一枚しかないだろ。」

……………まさかだと思うが一緒に寝ようと言わないだろうか。

「一緒に寝れば良いんですよ。」

予想☆的中。

「……………はあ、一枚しかないからしょうがないか。」

「それでは失礼します。」

「ん、おやすみ咲夜。」

「はい、お休みなさいませ兄様。」

二人は、眠りについた。

くく二人が寝てから5分後くく

「それじゃあ椀、先に私は戻りますね。早めに戻って来るんですよ。」

「わかつてますって、先輩。」

「それでは、失礼しますかね。………あやや？あれは星羅さんと紅魔館のメイドですかね？一緒に毛布にくるまって寝てますね。あいにく、此方には気付いてないようなので、写真を一枚。へカシャへふふふ、これは特ダネですね。早速帰って新聞製作といきましよう！」

文は最大速度で家がある天狗の里に飛んでいくのであった。ちなみにこの時の風圧で星羅達は、目が覚めた。

「ふああ………よく寝た。咲夜、起きろ。」

「んんん、あ、起きたんですね。それでは中に戻りましょう。」

「そうだな。」

そうして俺は歩き出す。早苗の事は、今は考えないでおこう。今はこの幻想郷、俺の第二の故郷で生きていく。皆んなを守るための力もあるしな。

どこまでも続く緑の草原。

果てし無く広がる青い空。

ここは高天原、その一角にある大国主の館の中を二人の神が歩いていった。

「あーうー………神奈子ー、神奈子が呼ばれるのはわかるけど、なんで私まで呼ばれるのさー………」

「それは私を聞かされていない。なんせいきなり大国主様に高天原の館の会議室に来说われただけだからな。」

そう話している内に大きな扉の前についた。

ギイイイイ、バタン

「大国主様只今到着しました。」

「なんだお前も呼ばれたのか、神奈子。」

そこにいたのは、同じ神々の建御雷神と須佐男、月読尊、天照大御神、八咫鳥、木花咲耶姫などの有名な神々や知らないような神々までもいた。

「さて、みな揃った様だな。まず、此処にお前達を呼んだのは、ある神々に人探しの依頼

をされた。人探しと言うか神探しだな。その内容は、「それは私達がお話しましょう、大國主さん。」……………いるなら声ぐらいかけてくれよ、オーデイン。」

「すまないな、大國主よ。幾分、急だったものでな。」

そこにいたのは、槍を持った優男風の男性と髭を生やした男性がいた。北歐神話のオーデインとギリシヤ神話のゼウスだった。二人とわかる瞬間、周囲にどよめきが走る。

「おいおい、なんで主神オーデイン様と全知全能のゼウス様が来てるんだよ。神奈子。」

「私に聞くなよな、建御雷神。」

二人は雷神と軍神のためそこまで同様は、してないようだが。諏訪子の場合は、土着神のため自分じゃ足元にも及ばない二人の神を見て唾然としていた。

「者共、静まれえい！」

「やめなさい。ヴァルキリー。他の神が怖がるであろう。」

「しかしゼウス様「それ以上余計な事は言わないでよろしい」……………」

「さて、それでは依頼のお話をしましょうか。依頼の内容は天使兼空想神のヴァリエールの搜索と」

「行方不明になっている破壊と創造の子神、クリエイクの搜索及び保護だ。」

「……………オーディーン、何故この日本の神々に搜索を依頼する。充分お前らで探せるはずだが？」

「事足りていたら依頼はしませんよ、大国主。」

「そうか、日本の神々よ！それぞれ場所にて搜索を行い、発見次第保護をするんだ！それでは、解散！軍神、八坂 神奈子と土着神、洩矢 諏訪子は、その場に残れ。話がある。」

「……………はい！……………」

ぞろぞろと会議室から皆が出て行く。その中、諏訪子と神奈子は困惑していた。何故、私達だけ話しがるのか？私達は何もしてないのに。そんな事を考えているとお呼びがかかったようだ。

「さて、お前らに話があるのには理由がある。ゼウスが言うには、クリエイクは生まれたばかりで行方をくらました日とヴァリエールがいなくなつた日が一緒なんだ。」

「そして、上位天使のセラフイム達の言っていた能力、波長の情報を日本の住民に照らし合わせた結果、1人の人間がヒットした。」

「その人間がお前達に関係があるんだよ。その人間の名は、………だ。」

「えっ、でもそれだったらいなくなつたから辻褃も会うけど……………」

「そんなはずはない！あいつが……………あいつが！星羅がその波長の持ち主なんて！」

三章 血染めの妖怪桜、再び

第14話 半人半霊の庭師（アホ？）、登場！

あの紅魔異変から星羅が来て一年近くたって、今は春の時期。博麗神社には、いつものとうり星羅と霊夢の姿があつた。

「あゝ、炬燵に入りながらのミカンはやっぱ良いわね。冬の時期は炬燵って決まってるわ。」

「霊夢、何を言っているんだ。今はもう季節は春だぞ。」

「何言っているのよ星羅。まだもうもうと雪が吹き荒れてるじゃない。」

「はあ?」

「え?」

情報が全く噛み合わない。確かに星羅は春の気配を感じているしカレンダーも春だ。これは完全に——

「異変だな（ね）」

こうして、星羅達異変解決者の第二の異変がスタートした。

~~~~~  
fly中~~~~~

星羅達が雪が降る中飛んでいると。

「おっ? 星羅と霊夢じゃないか。私達も博麗神社に向かおうとしていたから丁度いいな。」

「おはようございます。兄様。今回はお嬢様方が寒いのは苦手だと仰ったので、私が出向くことになりました。」

「魔理沙と首元にマフラーを巻いた咲夜がいた。珍しい組み合わせもあるものだ。」

「魔理沙に咲夜か、珍しい組み合わせだな。」

「そんな事行つてないで黒幕を見つけるわよ。」

「霊夢達が行こうとすると、」

「貴女達が異変を解決しようとするのなら、邪魔させてもらおうわ〜」「あー! しろくろ! 前はよくもやったな!」

「んあ? チルノか。それに……………だれだ? しつてるか、霊夢?」

「私も知らないわよ魔理沙。咲夜は……………当然知らないし。星羅は知らないし。誰かしら? 見た感じチルノと同じ感じね。」

「ん〜、私はレティ・ホワイトロック。冬の妖怪よ。それじゃあ早速はじめ「せええ

「いいいいらああああさああああん！」きやー！」「またかー！」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！あのレティとか言う奴がスペカを取り出したらいきなり黒いものが猛スピードでチルノ共々吹き飛ばしていったぜ！俺もなにをいつているのかわからねえが、ルーミアや烏天狗なんてチャチャなもんじゃねえ。もつと恐ろしい物の片鱗を味わった気分だぜ……………。

「あら、文じゃない。珍しいわね。」

「いや、星羅さん達が異変解決に向かっているらしいとの、情報を聞いたので、その情報を提供する代わりについていってもいいかなと思ひまして、どうですかね？」

「私はいいぜ。」「私もいいですよ。」「私も良いわね。」「みんながいいならいいぞ。」

「ありがとうございます！それで情報なんですが、」

その情報は、灰色の髪の毛で二本の刀を持っていて、白い玉？が周りをくるくる回っている人？妖怪？をみたそうだ。そいつは、桜の形をしている春の結晶？を集めてはどこかに飛んで行つてるそうだ。

「春の結晶？なら確か前、アリスがそんなものを拾ったとか言つてたな。」

「アリス？誰だ？」

「そーいや星羅はアリスの事知らないっけ、家に向かいながら教えてやるよ」

「よろしく頼むよ、魔理沙。」

「おう、それじゃあ教えるぜ! アリス・マーガトロイドっていつてな? 私と同じ魔法使いで人形使いなんだぜ。たまに人里で人形劇を披露してるらしいな。魔法の森の私の家よりも奥深くに住んでるぜ。主に人形を使用した戦い方だな。こんぐらいかな。」

「ありがとうな魔理沙。」

「ついたわよ。ここがアリスの家よ。」

アリスの家はどこにでもある木造の家……ではなく、西洋風なレンガの家だった。

「そうか……………」

「どうしました? 兄様。」

「いや、霊夢達は先にアリスに春の結晶についての話しを聞いてからリリー・ホワイトの家に向かってくれ。」

「はあ? なんで春妖精の家ってそう言う事ね、わかったは。頼んだわよ星羅。」

「霊夢、後で詳しく教えてくれよな! それじゃあ行くぜ。アリスー! ちよつと話しを聞きたいんだが! 邪魔するぜー!」

魔理沙達が全員入っていったのを確認すると、

「……………そこにいるのは分かってる。出てきたらどうだ?」

木の葉が擦れる音、風で草が揺れる音、そんな自然な音色の中で星羅の言葉が流れて数秒の沈黙。たった数秒なのに星羅には、数分に感じられた。

「驚きました。まさか気づくなんて、思いませんよ。不意打ちで仕留めようとしたが、無理でしたね。」

森の中から出てきたのは文からの情報が一致している女の子だった。

「お前は誰だ。」

「私は、魂魄　妖夢。半人半霊の庭師です。それ以下でもそれ以上でもない。邪魔するのなら」

そう言うのと彼女、妖夢は剣を一刀抜き。

「死んでください」

瞬間、物凄い殺気がぶつけられた。そんな殺気をぶつけられて、星羅は何食わぬ顔で、  
「不意打ちは無理とかいっても不意打ちするんじゃない、結界『星羅式反撃結界』」

ガキイイイ、

「離れたほうがいいぜ、半霊さんよ。」

キイイイイン、シュイイン

「……………やはり気づきましたか。」

「殺気がだだ漏れ、確かに剣速は早い、せめて殺気と気配を抑えろ。そんなんじゃない俺に不意打ちは効かないぜ。半人前。さて、お前の目的を教えて貰おうか。」

「教えるわけじゃないでしょう、私の目的が幽々子様の命で春になっても咲かない桜を咲か

せるために春の結晶を探すなんて。」

「……………そうか、次だお前の主人は人里にいるのか?」

「あの様な人多い場所に幽々子様がおられる訳ないだろう。幽々子様は上空にある冥界の入り口から入って階段を上っていったところにある白玉楼におられる。」

「……………なあ、お前けっこう肝心な所が抜けているって言われん?」

「?なんでですか?」

「だってさ、お前は冥界にある白玉楼の幽々子とか言う奴の命で春の結晶集めてるんだろ?」

「なっ!なんでそれを知ってるんですか!」

「自分で長々と説明してたじゃないか。自覚無しかよ……………」

「くくく/もういいです!!さっさと貴女を倒して結晶を回収させてもらいます!!」

「やっぱ、こうなるかあ。しかたないか、空想『七星結界』指定内容

・ 今いる場所の上空から半径20メートル外の何処かに発動

・ 周りから不可視化

・ 外からの干渉を拒絶

・ 俺が死ぬか許可するまで脱出不可

・ 相手を不死化



・ 結界を出たら傷、ダメージの回復

・ 死ぬほどのダメージ、傷をおったら結界外に転移および一定時間行動不可

以下の内容を指定。B a i s e m a I n v o k e 、 I n T i m e A c c e

l e r a t e !」

## 第15話 異変の真実

ガキン！ガキン！ガキン！ガキイイイイイン！！

2人の人物が未だ剣と剣を打ち合っている。その人物とは、片方は黒髪で短冊状の前髪の男性と白髪で半人半霊の少女だった。星羅と妖夢だ。

「しづといですね！幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』！」

「攻撃が単純だ。そんなんじやいくらスペルを放とうが当たらないぞ、流『逆撫で』」

妖夢が放つ斬撃もいとも簡単に受け流し、そのまま返し技を繰り出す。

「銘仙式剣術、返の形、下光天降」

星羅は、受け流した時の遠心力で刀を下から振り上げ一步踏み出し、さらに上段から振り下ろす――

「そう簡単にいい、やらせるかああ！半霊！」

――す、と言うことは無かった。妖夢の半霊が星羅の振り下ろす筈の腕の関節部分に当たったからだ。

「ほおう。半霊で相手の動きを止めたか。」

「いつまでも余裕ぶってええー！後悔しても知りませんよ！六道剣『一念無量劫』！」  
「……………そろそろいいかな」

小さい声で星羅がそう呟くと態勢が崩れるようにわざと、受け流した。

「……………！チャンス！人符『現世斬』。はああああ！」

妖夢はわざと態勢を崩したとは気づかずに、星羅の懐に潜り渾身の一撃を叩きつけた。

「……………くつうう、」

ドガン！ドガン！ドドドドドドドドオン！

フイイン

「思ったより時間を取られましたね。一旦幽々子様の元へと戻りますか。」

結界が解除されたことにより、妖夢は星羅が自分で解除したとは気づかずに白玉楼へ一旦戻っていった。

妖夢が去って数分後に星羅は、立ち上がった。

「あいつ気づかないとか、やっぱアホだろ。とりあえず、氷探が剣についてるからその反応を追いかけて行くかな。一応、あいつの向かうところで落ち合う予定だし。」

くくく目線を霊夢達にチェンジくくく

星羅が結界を発動させた頃、丁度霊夢達がアリスの元で話しが始まった時だった。

「なあ、霊夢く、いい加減なんで星羅が残ったのかを教えてくださいよ」

「そうね、それは私も気になりますね。」

「……………わかったは、アリスがきたら話すは。」

それから10分後……………

「霊夢に魔理沙、待たせたわね。貴女達が求めているのはこれかしら。上海。」

<シャンハイ>

上海が持つてきたのは文の情報と一致している春の結晶だった。

「これが……………春の結晶。」

「ほへ〜まんま桜の花弁だな。それより霊夢さつきと教えろよ。」

「うっさいわねー！ そんなに言わなくても教えるわよ。よく聴きなさい。これは推測だけれど恐らく私達は、つけられていたわ。」

「あややや、それはそれは、それで星羅さんは残ったんですね。つけていた相手は、情報にある白髪の女性ですかねえ。」

「……………あまり私抜きで話しを進めないでもらえるかしら？」

ここで空気になりかけていたアリスが口を開いた。

「あー、すまんなアリス。今私達異変解決中でな、この前話してた星羅が残った。と言うわけだな、霊夢？」

「そのとうりよ。それよりさっさと春妖精のところに行くわよ。」

「そうですね。どうせ、兄様の事ですし先に向こうに向かうでしょうし。」

「そうだったのね。呼び止めて悪かったわね、」

「いや、いいぜ別に。気にしてないしな。いこうぜ！霊夢！」

「あんたが仕切んな！」「貴女が仕切らないでちょうだい。」「魔理沙さんに仕切られるのは嫌ですかね。」

「orz、そんなに嫌なのかよ……………」

「そんなところに項垂れてないで行くわよ魔理「はーるーでーすーよーーーーーー！！！！あべしー」……………」

霊夢がドアを開けた時にいきなり白い物体が飛んできたため霊夢が反射的に強くチョップを叩きつけた。

「なによ、いきなり」

「あー、霊夢さん。それ、春妖精のリリー・ホワイトじゃないですか？」

え、マジで？と言いながら霊夢が下を見ると地面にめり込みながらも（ザ・怪力）「は、春で、す、よ……………」と言ってるリリーがいた。

~~~~~リリーが起きるまでお待ちを~~~~

「いや、すみません。いきなり突っ込んでしまつて……春の気配がしたので、つっぱしつてしまつて。」

えへへーと言いながら説明するリリーに対して。

「御免なさいね、つい反射神経で。そんな事よりも、リリーならこれを頼りに春がある場所わかるんじゃないかしら？」

「うゝん、格な場所はわかりませんが、何処から気配がするかはわかります。」

「何処かしら？」

咲夜が聞くと。

「上です。上空から気配がします。なんか扉見たいな物の隙間から、漏れています。」

「なるほどね……、上空から下を見ても分からないわけよ。行くわよ！」

「ちよ、ちよつと待てよ霊夢！上空つて言つても手がかりが扉だけだぞ!?どうやって探すんだ？」

「大丈夫よ、場所はわかるし。前に紫と閻魔様に教えて貰つたわ。」

「何処なんでしょうか？」

「亡霊達の住まう場所、冥界よ。」

霊夢達視点一旦終了

星羅視点

星羅は今上空に向かって飛んで行ったあの魂魄 妖夢とか言う子を追いかけて上がっている。

「あそこか。それにしてもでつかい扉だな。」

（あら？確かあの扉は………）

「知っているのか、ミリア。」

（ええ、私が間違っていないければ、あの扉は冥界門、亡霊達の集まる場所である冥界の入り口よ。協力的な結界が貼ってあるはずよ。）

なるほど、あれをくぐれば冥界ね。

「行くぞミリア。」

（りよ〜か〜いって行きたいけど前方扉の柱の後ろに誰か居るわね。近づいてみる？）
「（当然だ。）不可視『インビジブル』」

星羅が近づいて行くと会話をしているようで声が聞こえてくる。

「ルナ姉、バッチリだね！後は待つだけ！」

「何言ってるのりリカ、お呼びがかかるまで練習をするわよ。」

「えー、いいじゃん。」

「メルランまで何言ってるのよ………」

「そうだぞ、練習しないといざ本番になった時に苦労するぞ。」

「そうよね、ほら言ってるじゃない。早くするわよ！つて誰？」

「俺は東風谷 星羅だよろしく、」

「私はルナサ・プリズムリバーよ。赤色の子がリリカ・プリズムリバー、白に近い青色がメルラン・プリズムリバーよ、私が長女、メルランが次女、リリカが三女よ。」

「よろしくな、そう言えばルナサ達は、どうしてここにいるんだ？」

「私達はお呼ばれてるんだよー！なんでも冥界にある、咲かない桜が咲きそうだからその時に演奏して欲しいって、言われたの！」

と、リリカが説明する。その説明を聞いて星羅は絶句した。何故なら咲かない桜とは、かつて紫が封印した妖怪桜、死を誘う桜、名を、西行妖。

「急いで止めなければ！幻想郷が……崩壊する！」

第16話 蘇る妖

~~~~~冥界、??の庭~~~~~

「ここは冥界のある屋敷の庭、その庭の真ん中には大きな桜が今にも咲きそうな状態だった。」

「ついに咲くのね……………、この桜が。あと少しで春が集まる。」

「只今戻りました。現在、博麗の巫女達が此方に向かっています。残り少しの春は彼奴らから奪えばいいかと。」

「そうね……………それじゃあ、頼むわよ、妖夢。」

「はい、幽々子様。」

「いよいよわかるのね。あの桜の下に誰が眠っているかが……………」

~~~~~冥界、扉前~~~~~

「くそつ、前に人里で見た本に載っていた桜。まさかそれが今回の異変の中心なんてな。」

（主、かなり妖力が高まつてるは、急がないと。）

「わかってるよ、ミリア。もう少しで霊夢達が来るはずだ。」

ミリアと話していると突然、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「星羅！こんなところにいたのね。」

「きたか。異変の事について、わかったことがある。冥界に行きながら話そう。」

「別に良いですけど……この扉、結界が貼ってありますよ？」

「任せろ、雷灰『ライジングアルテミス』」

星羅がスペルを唱えると、星羅の刀の形が変わり、弓になった。しかし、普通の弓と違い、紫色の装甲が上と下にあり、全部が鎖で繋がれていて、上の装甲に黄色の玉がはめられている。

さらに、上には、羽？の様なものがついている。

「行くぞー！出力最大！星屑弓『スターダスト・アロー』」

再びスペルを唱えると、弓にはめてある玉が輝きだし羽？の様なものが4枚に別れた。そして、星羅が何も無いところから、雷の矢を取り出し、撃った。結界に当たった瞬間————

バチバチバチバチバチ、バリイン！、

ドゴン！！！！

——！！——結界が砕け散り、扉の一部に穴が開いた。

「……………」

「……………」

「……………」

『ええええええええええ?!?!?』

上空に五人の声が響いた。

~~~~~話をしよう、あれは今か（略）~~~~~

星羅達は、穴から冥界には入り（ちゃんと修復しました）、目の前の物に啞然としていた。

「この階段のぼるのか……………、冗談きついで……………」

「同感だな。」「不本意ですが魔理沙の言うとうりです。」「右に同じく。」「飛んでいくほうが、早いですね。」

順に魔理沙、星羅、咲夜、霊夢、文である。

「丁度いい、飛びながら説明しよう。」

星羅は異変の真相、妖怪桜のこと、敵の事、全て包み隠さずに、話した。

~~~~~少年説明中~~~~~

「おいおい、それ、本当か？」

「今冗談言つてどうする。……………とつ、敵さんのお出ましか。」

「やはりきたか、人間が4人に妖怪が1人かつて、なぜ貴方がここにいる。……………まあ、いい。今すぐお前たちの春を渡して、即刻ここから立ち去れ。」

「あんた、自分達が何してるかわかつてんの？」

「私は、幽々子様に従うだけだ。貴方達の指図は受けない。」

「てめえらが咲かせようとしてる桜はなあ！よ「問答無用！断想剣『草木成仏斬』！避ける！」

妖夢はいきなりスペルを使って斬撃を飛ばすが、五人はそれぞれに避ける。

「霊夢！先にいけ！こいつは俺がやる！水火『ミストフィールド』」

妖夢を覆うように霧がかかった。

「星羅！……………わかったわ。みんな、行くわよ！」

「いかせません！「てめえの相手は俺だ！風斬『一文翔』くつ！、また貴方ですか！」

霧から出ようとする妖夢にたいし、星羅は、霊夢達と妖夢の間に入り一文字の要領で、風の刃を飛ばす。

「邪魔を……するなああああああ！ 桜花劍『閃閃散華』」

「こちとら幻想郷の命運かかってんでなあ！ 神靈劍『輝閃千波』」

劍撃と劍撃がぶつかり合い妖夢の劍撃が勝ち星羅に届く……

「(と、思うじゃん?)」

ザシユユ、

「え？ な、なんで、当たったはずなのに。」

「……逆には無かった。逆に妖夢が切られたからである。」

「……幻夢斬『影斬り』十人形『シャドードール』ダブルスペル、鏡斬り『ミラーアタック』。これが今お前に使ったスペルの名だ。その傷ではもう勝てない、諦めろ。」

「そ、んな、私は……負けた? ……すみません、幽々子様。早く私を殺せ。情けはいらない。」

「何故だ?」

「何故だ、だと?」

「ああ、そうだ。何故勝負に負けたから殺す? 自分が従うべき人がいるのなら、最後まで、その身をもってしても、守ってみせる! 従うべき人が道を外したのなら、全力で戻せ!」

「……………!」

「今もお前の主人は死へと向かっている。」

「どういう……ことですか？」

「どうやら知らないようだな……、教えてやろう。お前らが咲かせようとしてる桜の名は西行妖、生を死へと誘う桜。まだ生きていた頃の西行寺 幽々子の死因だ。」

「!!」

「西行妖が咲いたら、おそらく……西行寺 幽々子は死ぬ。」

「そ、そんな、私が、幽々子、様を、ころそ、うと」

「まだ手はある。おそらくだが、俺らが向こうに着く頃には、戦いは終わっているだろう。だから、西行妖をもう一度封印する。」

「で、出来るんですか!？」

「出来る出来ないの問題じゃない。やるんだ。そうだよな、紫。」

「…………やはり貴方は凄いわね、星羅。封印なら任せて頂戴。絶対に幽々子を、幻想郷を壊させやしない。」

何処からともなく現れた紫は、もう感知しているみたいだ。おそらく、もう藍を向かわせたのだろう。

「そうと決まれば、治水『ヒールウィンディーネ』、これでよし。急いで屋敷に向かうわよ。」

「傷が………、治っている。あ、ありがとうござ『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ』」

「この音は、まさか。」

急に紫が青ざめ始めた。

「紫、まさか……西行妖が「無駄話している暇は無いわ！今すぐ、スキマに入って！飛ぶわよ！」っ！わかった。」

その場所には、もう誰もいなかった。

—————

「ついたわ！開くわよ！」

紫がスキマを開いて、見えた光景は——

「っ、これは……」

——みんなが血を流し、傷を覆いながらも戦ってる光景だった。

第17話 決戦!西行妖!

私達は、今、ある桜の前に立っている。

「これは……、凄い妖力ですね。写真を一枚(パシャ)」

「あんた、なに呑気に写真撮ってるのよ。文。」

「あややや、すみません。でも、そんなこと話してたら、敵のお出ましのようですよ?」
4人が一斉に上を向くと、そこには、扇で口元を隠しながら空を飛んでいる女性がいる。
た。

「あらあら、そちらからくるとはね。妖夢はどうしちゃったのね。それじゃあ、貴女達に選択肢を与えてあげる。苦しんで春を渡すか、苦しまず春を渡すか、好きな方を選びなさい。」

「それは選択肢って言わないぜ……、なら私達は、お前を倒して、春を取り戻す!恋符『マスタースパーク』!」

「あらあら、いきなりはないんじゃない?亡郷『亡我郷—さまよえる魂—』」

「ちよ、弾幕多すぎだろ!?!」

『魔理沙(さん)!』

「させませんよ、式神『仙狐思念』。」

突然、スキマが開き、そこから弾幕が飛び出し、魔理沙に向かう弾幕を打ち消した。

「あんたは……たしか。」

「久しぶりだな、博麗の巫女、白黒、烏天狗。紫様の命により手助けに来た。」

現れたのは、紫の式でもある九尾の大妖怪。名を。

「その従者は初めてだな、私は八雲 藍だよろしく頼む。」

「兎に角、今はそんな話してる場合じゃないぜ、」

「分かっている、式輝『四面楚歌チャーミング』」

「うふふ、もうすぐで桜が咲く……もう邪魔はさせないわよ、『反魂蝶——一分咲——』」

弾幕同士がぶつかり合い、煙が巻き起こる。その中から出てきた幽々子に向かって、連続でスペルを放つ。

「くらえ！ 魔符『ミルキーウェイ』」

「逃がしませんよ！ 風神『風神木の葉隠れ』」

魔理沙の弾幕を上から覆うような感じで文のスペルが幽々子に向かう。

「…………『反魂蝶——三分咲——』」

再びぶつかる弾幕。だが、弾幕は幽々子に届く前にかき消される。

「ちっ、全然とうらねえぜ！」

「あややや、密度濃すぎませんか？」

「……………」

「(? 幽々子様の様子がおかしい。まさか、西行妖が……自分で春を吸い取ってる?だとすると危険だな。早めにけりをつけさせてもらおう!) 式輝『プリンセス天狐——』 usion—』式弾『アルティメットブレイスト』これでどうだ!」

「……………『反魂蝶——五分咲——』」

「硬すぎでしょ、咲夜、これで決めるわよ。霊符『夢想封印 集』」

「分かっているはよ。メイド秘技『殺人ドール』」

「あはは、『反魂蝶——八分咲——』」

幽々子が弾幕を放ち、当たり、消えた瞬間。

「……だ! 時よ、止まれ!!」

世界が灰色に変わった。咲夜が時を止めたからである。この世界で動けるのは、咲夜だけ、いや、星羅もかろうじて能力で動けるだろう。

「……からは私の世界。貴女は、理解出来ずに殺られるだけよ。」

一瞬で幽々子の周りには弾幕が展開され、

「これが私、『咲夜の世界』よ。時は、動き出す。」

ダダダダダダダダダダダダ、

「せ、星羅、ごめんなさい。私達じゃ間に合わなかった。」

「いいんだ、霊夢。自分を責めるな。結界『絶 防御結界』

「この中に入ってくれ、後は……………俺がやる。」

「星羅……………ありがとう。」

霊夢達が結界にはいったことを確認すると。

「弾幕を撃てる人は結界の中からサポートしてくれ、撃てないものは、紫の手伝い。頼んだぞ。」

『分かった(わ)(ました)』

「……………さて、待たせたな、西行妖。相手をしてやる。」

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

「行くぜ!新星『ダークドラゴン』+新星『フェニックス』ダブルスperl!超新星『不滅龍 ウルボロス』!我が身を纏え、漆黒の焰、我は不滅なり!」

長々しい詠唱を終えたら、突如、黒い焰が星羅を飲み込み、焰が晴れるとそこにいたのは、黒い翼、禍々しい尻尾、長く鋭い紅い爪、牙のような歯、二本の黒い角、龍の鱗が生えた星羅がいた。

「ふう……………さあ、始めようか!!運命をかけた、ラストバトルを!!」

『グ

第18話 決着、そして別れ

最初に動いたのは、西行妖だった。妖力を纏った枝が星羅に向かって伸びてゆく。

「この程度、当たるかよー！」

しかしそれを、星羅は軽々と避けていく。避けた枝は、星羅を串刺しにしようと追尾するが、ちよこまかと避けることによつて、枝同士が絡まりあつたところで。

「燃えろ！ 獄炎『不滅龍の息吹』」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ?!』

星羅が放つたブレスは、絡まっている枝を焼き、西行妖が払おうとしても、全く消えることはない。むしろ被害が増えている。

「振り払おうとしても無駄だ。不滅龍の息吹は、対象を焼き尽くすまで消えることは無い。次はこつちからだ！ 新星『ヒュドラ』 + 新星『フェニックス』ダブルスペル！ 超新星『八岐大蛇』八つ首の大蛇よ、その力を持って、最恐の厄災となれ！」

瞬間、星羅が使つたウルポロスが消え、新たに違うスペルへと変化した。

火と水が混じり合つた様なものが噴き出し、星羅を包んだ。ウルポロスの時とは違い、星羅の背中から七つ首の大蛇が生え、星羅の顔も後ろの大蛇と同じような感じに

弾幕が向かう先には、封印の術式が。

パライイイイイイイイ

「そ、そんな。術式が壊れて……………」

ガラスが割れる音。それは、術式が壊された音だ。

「くっそ！やられた！紫！修復は可能か！」

「……………無理よ、術式の核まで全て破壊されたわ。修復は……………不可能よ。」

「嘘だろ……………。なら、紫。手がある、奴を封印するための手が。だから30秒、30

秒間だけ、耐えてくれ。」

（!!主それは!）

「（ミリアは黙っててくれ。）紫、頼む。」

「……………本当に出来るのね。」

「ああ、必ず成功させてみせる。」

「分かったわ、貴方を信じる。みんな！30秒の間、西行妖から星羅を守るのよ！」

『ええ！（おう!）（はい!）』

「ありがとう、みんな。そして、ごめん。」

星羅は誰にも聞こえない声で、謝り、手を前に突き出し魔力を集中させ、詠唱を開始する。

——あと25秒。

「あらゆる物を封印せし、我が魔法。今ここに、具現し、」
『オオオオオオオオオ』

西行妖が枝を伸ばす。

「させませんよ！岐符『サルタクロス』！」

「はあ！六道剣『一念無量劫』！」

が、文と妖夢の攻撃により防がれる。

——あと15秒。

「我を代償とし、対象を永久の封印へと誘う！」

『オオオオオオオオオ』

西行妖がさっきの倍になる量を撃つ。

「星羅の邪魔は、させないぜ！恋符『マスタースパーク』！」

「星羅様は、私が守る！幻幽『ジャック・ザ・ルビドレ』！」

またもや魔理沙と咲夜によつて撃ち落とされる。

——あと0秒

「これで最後だ！西行妖！」

星羅の手が淡く光輝き、西行妖に向かって走り出す。

最後の足掻きと、弾幕を飛ばす。

「おとなしくしなさい！神技『八方龍殺陣』！」

「私達の希望を、もう壊させない！紫奥義『弾幕結界』」

ドドドドドドドドドド！

弾幕同士がぶつかる中、星羅は遂に西行妖の木の根元にたどり着いた。

「うおおおおおおおおお！禁術『代・償・封・印』最後だあああああ！」

発動と同時に、星羅の周りに発光する光の玉が現れ、そこから西行妖を覆う様に大量の札が出現。覆い終わったところで、閃光が走る。

光が収まると同時にそこにあつたのは、枯れた状態の西行妖と両手を西行妖につけている星羅の姿だった。

「くっ！っはあ、はあ。何とか成功だな。」

『星羅！（星羅様！）（星羅さん！）』

こうして、冬の異変。春雪異変は幕を閉じた。

と、思われた。

「え？」

誰かが言った。誰かはわからない。そんな事を考えてる暇はない。何故なら、星羅の姿が徐々に薄れているからだ。

「もう、時間か……………」

「星羅……………？どうしたの？なんで薄れて——」「星羅、まさか！さつき使ったのって、魔理沙？知ってるの？」

「知ってるの何も、おそらくは、星羅が使った技は魔法使いの中でも禁術とされている魔法、代償封印。だろ？」

「やっぱり魔理沙にはばれたか。」

やれやれ、と首を横にふる星羅。

「代償は、自分にしたんだろ。その魔法陣はランダム転移。運が良ければ町の中、運が悪ければ敵の目の前なんて事もあり得る。」

「伊達に、魔法使いじゃないな。」

魔法陣の光が徐々に大きくなっていく。

「そろそろか、みんな、もうお別れだ。永遠に会えない訳じゃない。だから、霊夢、魔理沙、咲夜、文、即急だけど妖夢、お前達にスペルを用意した。」

「文には、疾星『天嵐星風』。

咲夜には、時星『スターエクスプロードワールドS・E・W』。

妖夢には、妖星『星閃瞬斬』。

魔理沙には、魔星『闇夜ヲ貫ク一筋ノ閃光』。

そして、霊夢には、霊星『夢想七星』だ。

だいじにしてくれよ？最後に！……………俺が戻ってくるまで、幻想郷を頼んだぜ。」
ヒュユユユユユユユイイイイイイン

ゆつくりと光が大きくなる。そして、目の前が光に覆われた時、光は、晴れ。そこには、星羅の姿はなかった。

『頼んだぜ！』そんな声が風に乗って霊夢達の耳に聞こえた様な気がした。

「星羅……………まかせない！あんたが戻って来るまでは、私達が！幻想郷を守ってみせる！」

霊夢は、声を振り絞り、星羅に向かって声をかけた。

その声が星羅に届いたかは、定かではない。

第四章 巻き込まれ!? 幻想郷に帰るために……

第19話 再開した同級生

「(床が冷たい……、肌触りから大理石みたいなものだな。と言う事は何処かの建物の中か、)」

星羅が目を覚ますと床に魔法陣が書かれていることに気づき、更に周りには、見覚えがある制服をきた64人と教員服か?をきたのが2人。

「この制服……何処かで見たとあるような気がするけどなあ………」

(主人、念のために無零は隠したら?下手に敵だと思われると厄介だし。)

「そうだな。不可視『インビジブル』これでよし………おつ、起きたようだな。」
ちようど星羅が『インビジブル』で無零を隠した時に起き始めた。

「ん、んんん?あれ?ここどこ?」

「異世界転移k t k r!」

「あわわわわわ!?ど、どうしましょ!」

かなり焦ってんな。まあ、しようがないか。いきなりこつちに飛んできたからな。

「そこの方、何処かでお会いしませんでしたか？」

「は？」

突然声をかけられ振り向いてみると、そこには、いかにも大和撫子と言つてもいいであらう女性がいた。

「(むむむむ〜思い出せない。なんだっけな〜?)」

(主人、もしかして主人が外の世界で行つてたガツコウ? つてところの同級生じゃない?)

「(あ………) ああああ!!! 思い出した! 霧亜か!」

「? 何故私の名前を?」

「あ、そうだったな。せ「おお! 成功したぞ!」……また後で言うよ。」

いきなりこの部屋に入ってきたのは、ゲームで言う神官の様な人が3人、魔術師の様な人が4人、ドレスをきている金髪の女の子が1人、ていうかこの子姫様っぽいな。

「勇者の方々! どうか、どうかヘルスティアをお救いください!」

「すまない、いきなり言われても困るのだが……。」

「あ! すみません! お父様が説明されるのでついてきて下さい!」

あの女性は確か2組の乃木 咫墮子先生だな。するとここにいるのは、おれがいた1

組と2組か、とにかく今は付いて行こう。念のために警戒はしておこう。

数分歩いてようやく国王がいる会見の間とか言うところのについた。

「国王様、勇者御一行をお連れしました。」

『ご苦労、入るが良い。』

「はっ！」

すると扉が開き、会見の間に入った。そこにはおそらく貴族であろう集団と親衛隊？
がいた。玉座に座っているのが国王だろう。その隣には、王妃と王子がいた。

「よく来てくれた、勇者達よ。私は、このセントハイム王国の国王である、スザキメール
セントハイムだ。私の隣にいるのが王妃のメイヴィメールセントハイム。反
対側が、王子であるバティウスメールセントハイム。そして其方達を連れてきたの
が王女であるミュリアメールセントハイムだ。」

ここまでくるともう先が予想できるな。そうだ！

「(ミリア、貴族の中に入って何を考えているのかを探ってくれ。)」

(はいはい、それじゃ、行ってくるわ。)

さて、おそらく、魔王を討伐してくれだったり魔神を封印してくれだったり魔族を滅ぼせとかだろろうな。

確か俺のクラスに正義感むっちゃあつて人気のある奴がいたな。みんなついてくたろうし、まあ、俺は当然——

「と言う事なのだ。勇者達よどうかヘルスティアを助けてくれ。頼む。」

そう言い王が頭を下げる。つて、一国の王が簡単に下げていいのかよ。しかも俺話聞いてなかった。

（主人、戻ったわよ。案の定、嫉妬やら欲望やらが混じり合った様な奴ばかり。気持ち悪い。ついでに国王やらの中にも入ったけどね——）

「（そうか、ありがとう。）」

「王様！頭を上げてください！僕達が必ず、魔王を討伐してみせます！そうだよね！みんな！」

あー……………やっぱそうなるかーまあ、正義感強いしね。仕方ないのかな？彼は三里 光輝。正義感バリバリのクラスの人気者。文武両道の面倒くさいやつだっけ？

「おう！光輝だけにまかせれるか！」「私も付いてくは！」「俺も手伝うぜ！」

「みんな……………ありがとう！」

「生徒がやるんだから先生もやらなければいけませんね！」

「いや、孤母先生はやめておいたほうが……」

……あのチビ先生なのか!?俺がいなくなってからきたのか……。

「貴女も参加するののか?」

「ん?ああ、いや。俺はー」

「霧亜さんも手伝ってくれるかい?それに……貴女も参加しますか?」

「俺はー」

まつ、魔王討伐より幻想郷に戻る方優先だからなあ。

「俺はー参加しない。魔王討伐にはお前らだけでいけ。」

「えっ?き、君!困ってる人がいるんだよ!助けるのは当然じゃないか!」

「うるさいな、いちいちお前の考えを押し付けるな三神里 光輝。人の名前も覚えて無

いのにな。それに、国王!……俺は『巻き込まれ』なんだろう?」

「……なんのことかさっぱりだな。」

「しらばつくれてもばれてるぜ。あんたらの心は読ませてもらった。いや、正確には読んでもらったかな?」

「どうやって読んだかわかるところだが、まあいい。其方の言うとうり、其方は巻き込まれたのだ。本来呼び出される勇者は66人。だがきたのは67人。本当にすまないと思う。」

「いいよいいよ別に、すぐには戻る方法が見つからないし。世界を回りながら探すよ。」
「そうか……なら最大限のサポートはしよう。ロズウェル！この方を部屋に案内しろ。」
するとどこからともなく現れたメイド……メイド？

「承知。では……まずお名前をお伺いしても？」

名前ぐらいはいいか……ついでにこいつらが気付くだろうし。

「俺は、東風谷 星羅だ。」

「えっ！」「は？」「なっ！」「ほへ？」

「それじゃ、案内頼みました。」

「承知いたしました。星羅様。」

「おお、そうじゃった、星羅殿。この国についての勉強に出たかったらロズウェルに
てくれ。図書館にも入れるよう手配する。」

「ああ、ありがとよ。」

バタンっ

—————

カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ

「……………」

「……………」

「気まずい！」

「なんだこの空気！咲夜と一緒にいる時はこんな気まずくはないぞ！」

「あの、ロズウエルさん。」

「敬語は要りません。星羅様。呼び捨てで結構です。」

「え、いやでも……………」結構です。」……………はい。」

「なにこの人怖い（ブルブル

「つきました。こちらになります。どうぞ。何かご用がありましたら、読んでくだされ

ば結構です。では」

「というときなり消えた。」

「何者なんだろ……………ロズウエルさん。」

「にしても、広いなあ。これが巻き込まれの報酬か？」

「部屋の広さは、だいたい縦横高さ10メートルありそうだな。1人にしてはでかい

ベットだな。タンスに机、窓からは街が見渡せるな。」

「……………暇だな。スベルでも作るか。」

「……………製作中だよ……………」

コンコン

「星羅様。国王様がステータスカードの確認を忘れていたらしいので今からでよろしいでしょうか?」

「ん? ああ、わかった。今行く。」

星羅はベットの上に広げていたスペルを回収し、部屋を出た。

「(空のスペルがきれちやたなあ、どうしよう。)」

むむむむ? と唸っているとどうやらついた様だ。

「こちらです。」

「おお、きたか。」

連れてこられた部屋は、ガラス張りの部屋だった。真ん中に水晶が置いてある。と言うかなんで国王がいるの?」

「なんであんたがいるんだよ。」

「いや…、雑務で勇者達のステータス見れなかったからさ。」

「後で一覧を渡しますから、あと雑務は国王様が貯めてたからでしょう。」

「いや…まあ…そうだけど……」

国王自業自得じゃねえか。

あの人は国王御付きのメイドだろうか？

「そんなことより星羅様のステータスカードを」

「そうだったな。星羅殿。手を水晶にかざして『ステータス』と唱えてくれ。」

「ああ……『ステータス』」

唱えると水晶が光りだし一枚の青いカードが出てきた。

「なんて書いてあるのか……な……な……」

な、なんだこれ？

~~~~~

名前：セイラ コチャ

性別：男

称号：new! 《幻想の渡り人》new! 《スペルマスター》new! 《間違いられ  
しもの》new! 《星の一撃》new! 《絶望と狂気》new! 《絶星》new! 《記  
憶図書館》

ステータス

力：・%+ 30・\$\$\$T25—  
€

知力：@ (&) @!!' & ) ( (& . ) !?!

敏捷：& ) ! ) & ) @ & ) ( ; ? ) ;

体力：) & . ( ? & !? ; ; ? @ , v c @ .

魔力：. % ; ? , ! & . ) !' j ( . & ( ! )

耐久：@ ) , & @ & ! & @ . @

生命力：. @ ?! ? ; ; @ " : | ;

精神力：/ ( & " ! ; ; / | ( ? ) ( & (

スキル：???

『スペル作成』『スペル登録』

『新星・超新星』『狂気・絶気』

スキル：ユニーク

『空想魔法』『空想武技』

『記憶魔法』『記憶武技』

『完全なる記憶』

スキル：ノーマル

『銘仙流戦闘術・自』

- 『全火系統魔法・幻』
- 『全水系統魔法・幻』
- 『全風系統魔法・幻』
- 『全土系統魔法・幻』
- 『全光系統魔法・幻』
- 『全闇系統魔法・幻』
- 『全属性外魔法・幻』

~~~~~

なあにこれえ？